

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第87集

み つ い
三 ツ 井 遺 跡

1999

財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター



遠路の遠景（北西より 1994年撮影）



97B区 古墳時代以前の遺構



96A区 SB01 カマド部分



97B区 SK88 遺物出土状況



96B区 SD28 遺物出土状況



97Ab区 弥生時代前期の水田跡



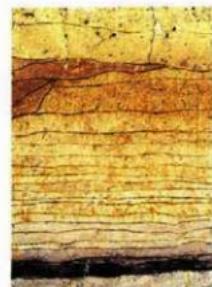
96T1 SK01 遺物出土状況



97Ab区 SD46・47 ベルト北壁（↑は盛土部分）



97Ab区 南壁（↑は盛土部分）



97Ca区 北壁
谷部分、左上方は
古代の溝（SD21）



上：縄文時代の遺物

下：弥生時代前期の遺物

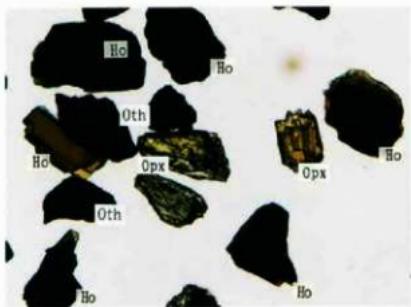


上：弥生時代後期～古墳時代の遺物

下：古代の遺物



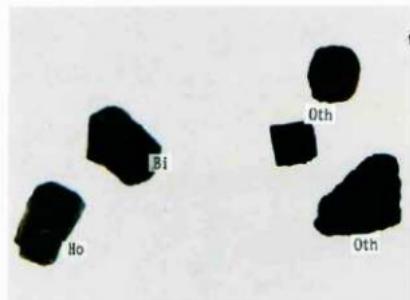
上：中世以降の遺物 下：縄文・弥生時代の石器・石製品とその制片



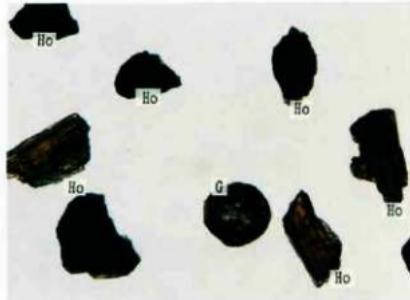
1. 純文土器 96Cb SK90:80



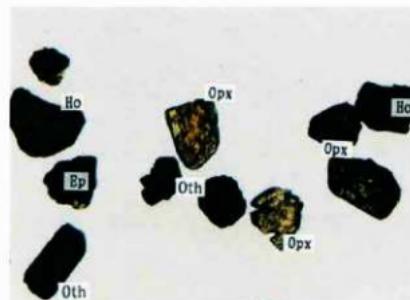
2. 純文土器 97Ab MB20c・検Ⅲ:61



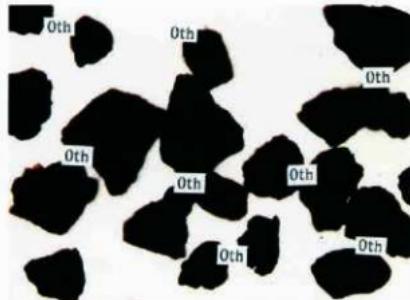
3. 純文土器 97B MA17r・検Ⅲ:102



4. 純文土器 97B MA16t・検Ⅲ:90



5. 异生土器 96Ti SK01:161



6. 异生土器 96Ti SB03:125

0.5mm

Opx:斜方輝石, Cpx:單斜輝石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, G:ザクロ石, Ep:緑レン石, Oth:その他.

胎土中の重鉱物

序

濃尾平野のほぼ中央に位置する愛知県一宮市には、数多くの貴重な遺跡が点在しております。そして、そこには地域に生きた人々の足跡が認められ、同時に豊かな文化が育まれてきたことを知ることができます。

今回、名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査として、水田と畑地の交錯する島畠景観を良好に留めている地域として知られている一宮市丹陽町の三ツ井遺跡を発掘調査しました。この調査によって、この遺跡が縄文時代後期から始まり、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代など、各時代にまたがる複合遺跡であることがわかりました。今回の調査成果が学術的な資料として、また社会教育や学校教育等、幅広く活用され、埋蔵文化財に関して皆様のご理解を深める一助になれば、幸いに存じます。

発掘調査の実施にあたっては、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成11年8月

財団法人愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮泰啓

例　　言

1. 本書は、愛知県一宮市丹陽町大字三ツ井・重吉に所在する三ツ井遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、平成8年（1996）4月—平成10年（1998）3月である。
4. 調査面積は、平成8年度が6,123m²、平成9年度が5,977m²で、計12,100m²である。
5. 調査担当者（調査時、愛知県埋蔵文化財センター調査課所属）は、以下の通りである。

平成8年度　高橋信明（課長補佐兼主査）、山本寿徳（調査研究員）、小川芳範（同）
平成9年度　大崎正敬（主査）、山本寿徳（調査研究員）、田中伸明（同）、早野浩二（同）
6. 調査及び報告書作成にあたっては、以下の関係機関からご指導、ご協力を得た。（順不同）

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団名古屋管理局、一宮市教育委員会、一宮市博物館、稲沢市教育委員会、御大阪府文化財調査研究センター
7. 調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々からご指導、ご教示を賜った。（順不同、敬称略）

金田章裕、千葉豊、外山秀一、能登健、山崎純男、工渠善通、藤澤良祐、金子健一、赤羽一郎、原田幹、野口哲也、城ヶ谷和広、大矢頭、紅村弘、小野久隆、岡本茂史、河角龍典、亀井聰、渡辺博人、立松彰、田中清美、三好美穂、伊藤基之、古田功治、岩野見司、土本典生、久保楨子、毛受英彦、賛元洋、愛甲界寛、北條獻示、松岡輝幸、田崎博之、小田富士夫、藤田三郎、吉田博之、佐藤由起男、横木輝彦、豊岡卓之
8. 遺物整理及び報告書作成にあたっては、以下の方々の協力を得た。

仲井光代、山本律子、山田有美子、岡田真知子、加藤美和子、山川和子、小崎暢子
9. 出土遺物の写真撮影にあたっては、深川進氏の手を煩わせた。
10. 発掘調査及び報告書作成事業に参加・協力して頂いた方々は、以下の通りである。（順不同、敬称略）

宮崎美穂子、堀尾美枝、山川美智子、石井春利、鶴岡京子、青井三男、瀬戸照之、瀬戸和子、赤塚ひろ、岩田良雄、岩野きよ江、小島勝子、斎藤ツヤ子、柴田昭子、伊藤孝枝、佐藤洋子、近藤宏、小泉幸雄、新木ヨリ子、青井義昭、青井紀子、安藤民子、植手香代子、杉山加代子、木村幸雄、木村末子、桜井きみゑ、桜井きみ子、桜井須美子、大野和子、西尾孝行、服部貞子、松山秀子、木村誠子、杉山恭也、加賀智之、鷹田真也、松本美和、浅野知之、中村晋也、若杉隆治、後藤茂、佐々木清孝、石河安明、水野良子、中村博、坂薫、岩田陽子、大野啓子、岡村和彦、小川恵子、後藤はつ美、本多伴子、矢藤節子、桜井幸代、山田くに子、高橋益次郎、松本千代美、佐藤しづ、星野初恵、速水大、山田啓子、大宮克美、野村栄、尾崎和美、八木佳素美、古橋佳子、岩本佳子、阿部佐保子、服部恵子、宇佐美美幸、田中和子、野川佳江、木全典子、宮崎照美、伊藤典子、土井てる子、加藤聰子、平野みどり、眼部里美、飯田祐子、中村たかみ、本多恵子、中村知嗣、武田紀子、眼部亜紀子、武村文孝、服部陽介、宮崎奈緒美、藤田和佳子、早川友司

11. 本書の執筆は、以下のとおりである。なお、全体の編集は、田中伸明が担当し、第4章の編集は、鬼頭剛が担当した。

第1章第1節、第3節、第2章、第3章第1節1・4、	
第2節、第3節2、第4節1、第5章、付論	田中伸明
第1章第2節、第4章第1節	鬼頭 剛
第3章第1節2、付論	永井宏幸
第3章第1節3	早野浩二
第3章第1節4（土師器）・5	仲井光代
第3章第3節1	川添和曉
第3章第4節2	鈴木正貴
第3章第4節2	蓬山誠一
第4章第1節	堀木真美子
第4章第1節	尾崎和美
第4章第2節	辻本裕也（パリノ・サーヴェイ㈱）
第4章第3節	松葉礼子（パレオ・ラボ㈱）
第4章第4節	矢作健二（パリノ・サーヴェイ㈱）
付 論	原田 幹（愛知県教育委員会文化財課）

12. 本書で使用している遺構記号は、以下の通りであるが、厳密な統一性はない。

S K…土坑、 S D…溝、 S E…井戸、 S B…建物（堅穴住居含む）

S T…耕作地（水田・畑地）、 N R…自然流路、 S X…その他不明な遺構

13. 調査及び本書で使用した座標は、国土座標第VII系に準拠した。

14. 本書で使用する遺構埋土等の色調については、「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄編著、財団法人日本色彩研究所、1989年度版）を参考に記述した。

15. 調査の実測図、写真等の記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

16. 調査による出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

巻頭カラー写真図版

序

例 言

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	田中伸明 … 1
第2節 地形・地質	鬼頭 剛 … 4
第3節 歴史的環境	田中伸明 … 6
第2章 遺構	田中伸明 … 12
第1節 遺跡の基本層序	12
第2節 遺構の概要と時期区分	14
第3節 各時期の遺構	24
1. 繩文時代	24
2. 弥生時代Ⅰ期	27
3. 弥生時代Ⅱ期	32
4. 弥生時代後期～古墳時代	34
5. 古代	36
6. 中世以降	38
第3章 遺物	40
第1節 土器・陶磁器類	40
1. 繩文時代	田中伸明 … 40
2. 弥生時代前期	永井宏幸 … 55
3. 弥生時代後期～古墳時代	早野浩二 … 66
4. 古代	田中伸明・仲井光代 … 76
5. 中世以降	仲井光代 … 82

第2節 その他の土製品類	田中伸明	90
1. 土錐		90
2. 人形・玩具類		90
3. 加工円盤類・陶丸		92
4. 研磨痕土器類		94
第3節 石製品類		100
1. 繩文・弥生時代の石器・石製品	川添和晩	100
2. その他の石製品	田中伸明	112
第4節 金属製品類		113
1. 銭貨	田中伸明	113
2. その他の金属関連資料	鈴木正貴・藤山誠一	114
 第4章 自然科学分析		118
第1節 三ツ井遺跡の古環境解析	鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美	118
第2節 堆積物微細構造観察による土地利用状況の検討	辻本裕也 (パリノ・サーヴェイ株)	147
第3節 三ツ井遺跡出土木材の樹種同定	松葉礼子 (パレオ・ラボ株)	157
第4節 三ツ井遺跡出土土器の胎土分析	矢作健二 (パリノ・サーヴェイ株)	159
 第5章 まとめ	田中伸明	164
 付 論		
「弥生時代前期の諸問題」	永井宏幸	170
「三ツ井遺跡出土剥片石器の使用痕分析」	原田 幹	186
「島畠景観の形成と発展について」	田中伸明	192
 遺構一覧表		
遺物一覧表		
写真図版		
報告書抄録		

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯と経過

調査経緯

三ツ井遺跡は、愛知県一宮市丹陽町三ツ井・重吉に所在し、青木川と五条川に挟まれた標高7~8mの自然堤防と後背湿地上に展開する遺跡である。現況は、水田と畠地の交錯する鳥畠景観を良好に留めている。名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴い、愛知県教育委員会は、平成6・7年度に事業予定地内で遺跡の有無と範囲の確認調査を実施した。その結果、古代~中世の遺跡の存在が確認され、また、下層に堆積した黒色粘土層からイネのプランツ・オバールが検出された。このため、日本道路公团から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成8年4月から平成10年3月まで発掘調査を実施した。

調査経過

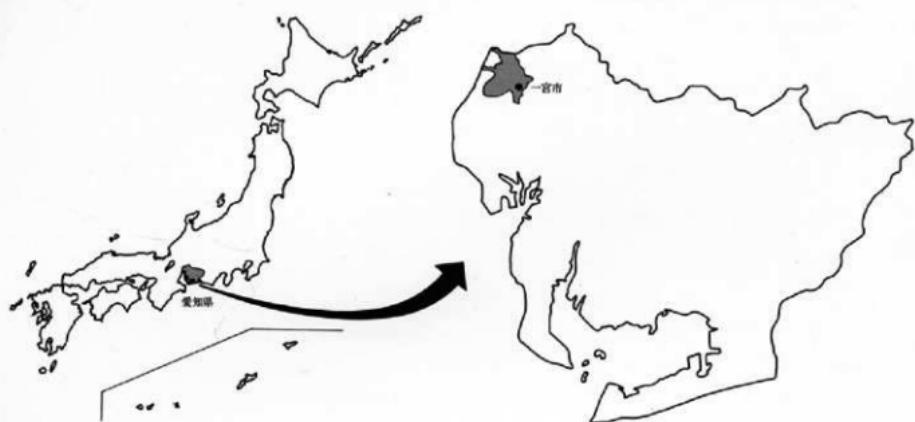
平成8年度は、先行事業である舗道建設部分4,000m²をA区~D区に4分割し、さらにB区とC区については、それぞれBa区~Bc区、Ca区~Cb区と細分割して調査した。後に調査面積の契約変更があって、面積増加分2,123m²をE区として、合わせて6,123m²を調査した。また、鳥畠形成過程基礎資料を得るために、調査区の鳥畠（鳥畠1~8）と開発予定地内に存在する鳥畠（鳥畠Tb~Ti）に1ヶ所以上のトレンチをいれ、断面を確認した。（鳥畠Taは未確認。鳥畠Tiについては、弥生時代前期の遺物・遺構が多く確認されたCb区の東に隣接するため、遺構・遺物の確認を行った。なお、遺物の出土地を記録するため、便宜上、96Tb~Tiの名称を用いた。）平成8年度の調査の結果、本遺跡は、縄文時代後期から始まり、多少の断続はあるが、弥生時代、古墳時代、古代、中世など各時代にまたがる複合遺跡であることが明らかとなった。

平成9年度は、調査区をA区~C区に3分割し、さらにA区とC区については、それぞれAa区・Ab区、Ca区・Cb区と細分割して、合わせて5,977m²を調査した。また、調査区内の鳥畠（鳥畠9~11）の断面を確認した。

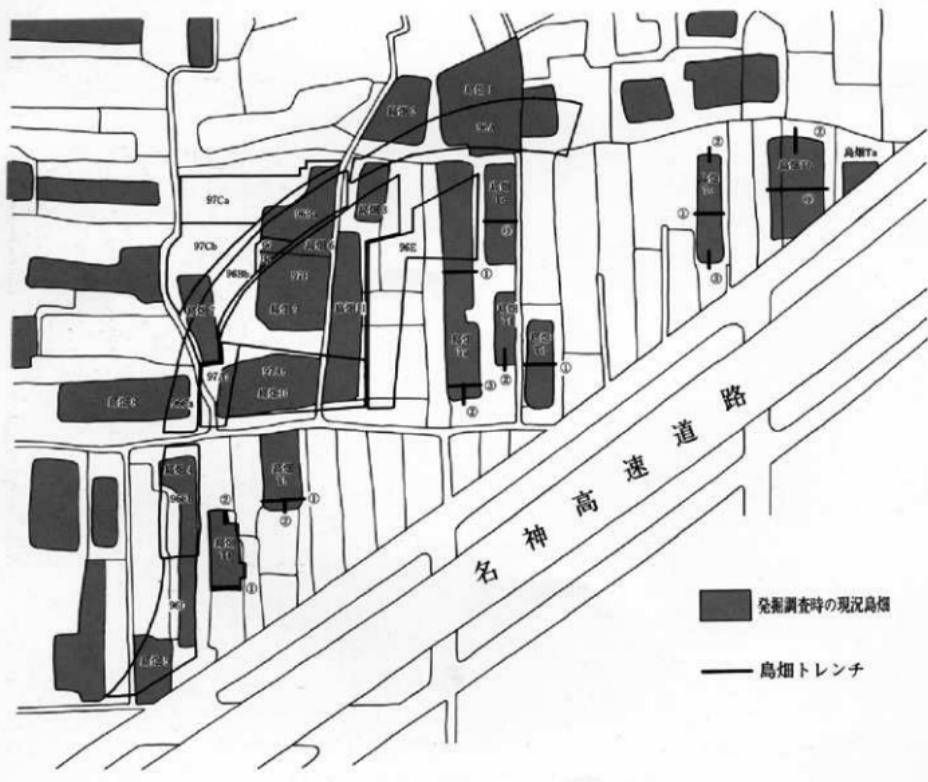
なお、それぞれの年度別調査区、担当者、調査期間、面積は第1表に示す通りである。

年 度	調査区	調査担当者	調査期間	面積(m ²)	備考(調査区の細分化)
平成 8 年度	96A	高橋・山本・小川	96.4~6	1,400	
	96B	高橋・山本・小川	96.8~11	1,000	Ba・Bb・Bc区に細分割して調査
	96C	高橋・山本・小川	96.11~97.1	840	Ca・Cb区に細分割して調査
	96D	高橋・山本・小川	96.6~7	760	
	96E	高橋・山本・小川	97.1~3	2,123	
平成 9 年度	97A	大崎・山本・田中・早野	97.4~5, 97.8~12	1,797	Aa・Ab区に細分割して調査
	97B	大崎・山本・田中	97.4~8	2,580	
	97C	大崎・山本・田中	97.11~98.3	1,600	Ca・Cb区に細分割して調査

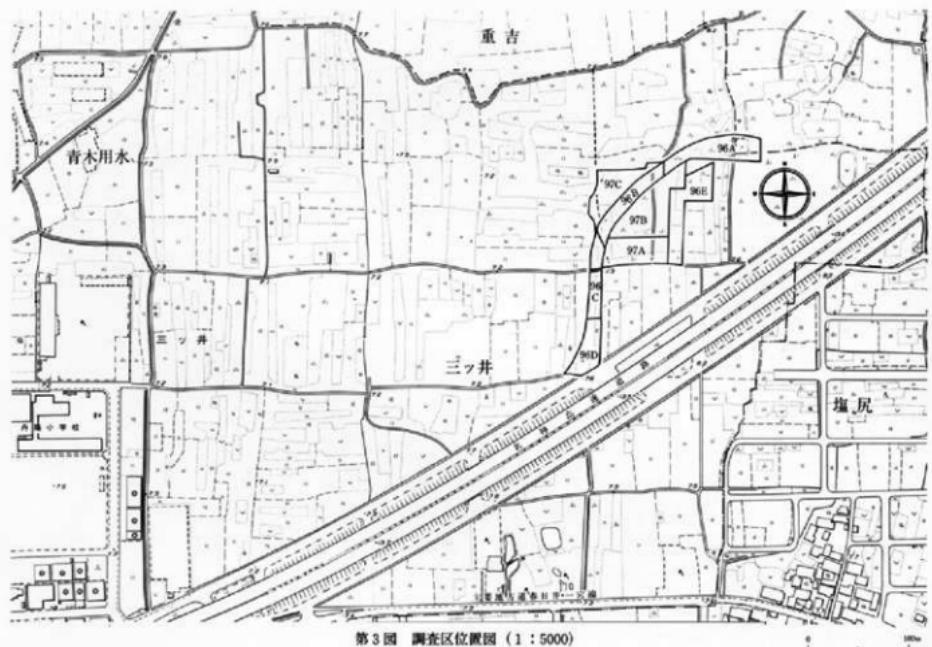
第1表 調査進行表



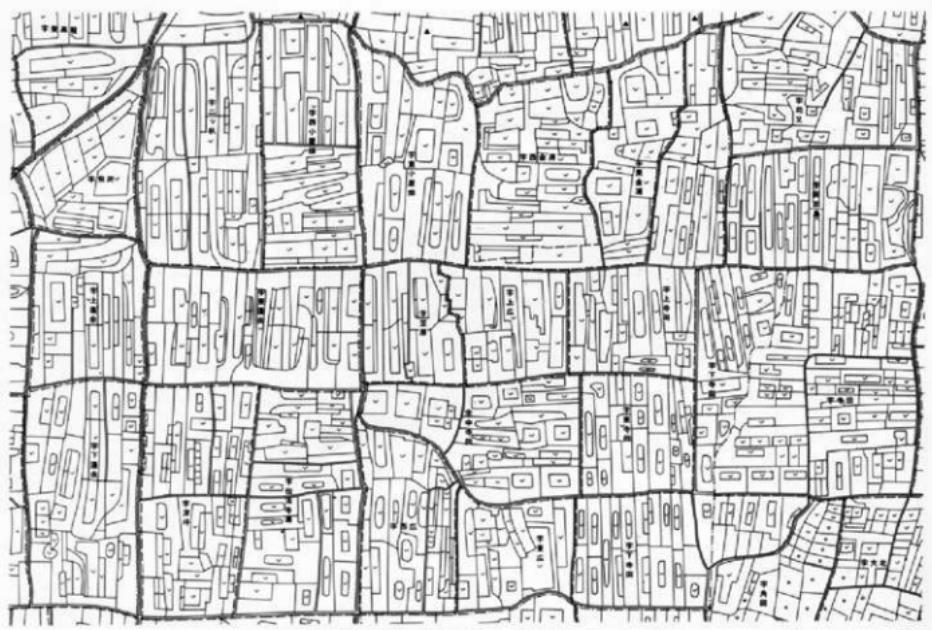
第1図 三ツ井遺跡の位置



第2図 調査区・鳥畠位置図(1:2000)



第3図 調査区位置図 (1 : 5000)



第4図 明治17年地籍図 (丹羽郡三ヶ井村付近) (1 : 5000)

第2節 地形・地質

伊勢湾に臨む濃尾平野は西縁を養老山地に、東縁を台地や段丘群の発達する更新統堆積物によって囲まれるわが国屈指の平野である。濃尾平野には木曾川・長良川・揖斐川などの諸河川により運搬された堆積物が広く分布し、地形は北から南へ扇状地帯・自然堤防帯・三角州帯に大きく分けられる。

地形概説

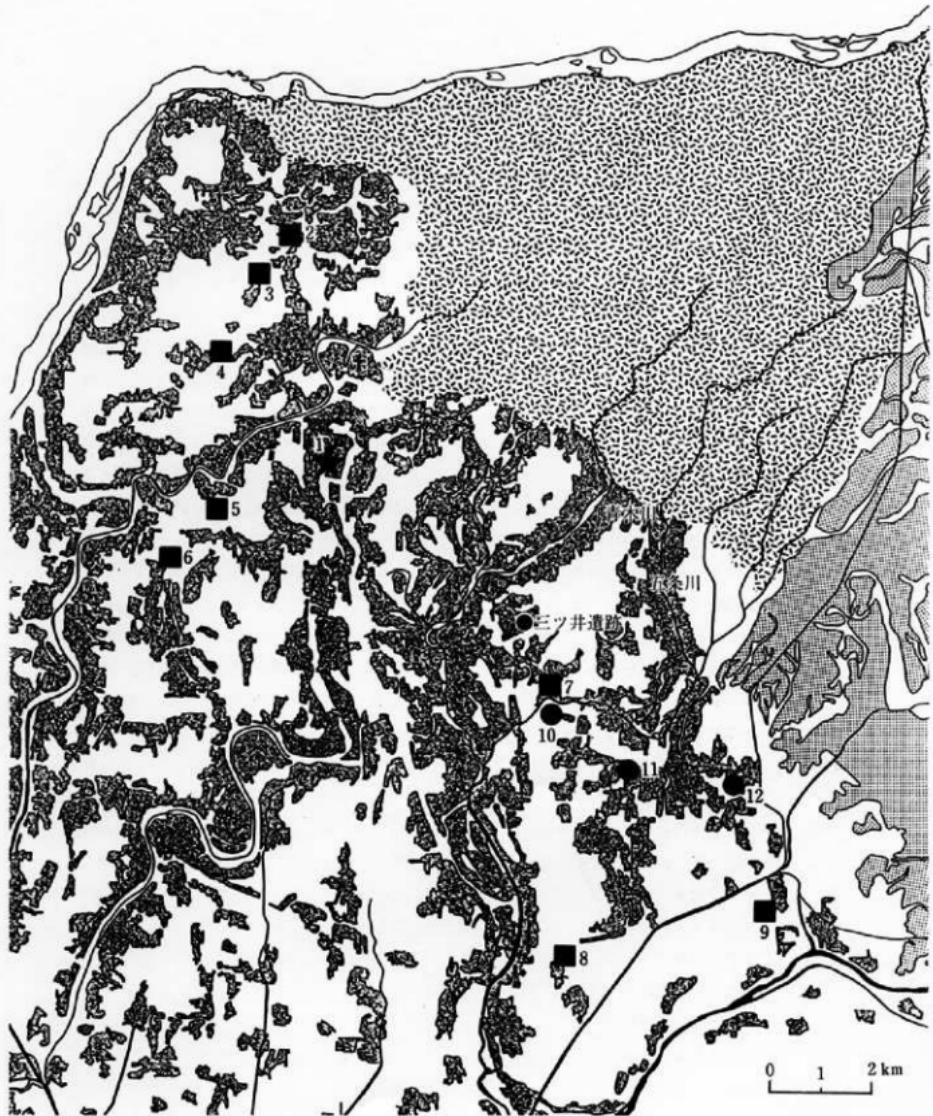
調査地である一宮市三ツ井地域は濃尾平野の北東部に位置する。平野北東方向の大山扇状地の末端部から南西方向に広がる自然堤防地帯に位置し、周辺には多くの自然堤防が確認される（例えば、森山、1972；国土地理院、1968）。これは、大山扇状地を分流してきた古木曾川水系の諸河川が、礫質の粗粒堆積物を扇状地部に堆積させ、相対的に緩傾斜の低地帯に砂質堆積物を旧流路の両側に沿って自然堤防として累積してきたからである。古木曾川水系諸河川の流路変遷は古文書等から推定されており、大山扇状地地域には東方より一之枝川、二之枝川、三之枝川、黒田川が北東から南西方向に流下していたことがわかっている（多田・井間、1955）。調査地は二之枝川-青木川-五条川水系にある。伊藤（1998）は考古学的な見地から平野北東部および東部に分布する遺跡を、地下層序で確認される暗灰色粘土層の生活面の有無により遺跡を分類した。弥生時代前期から古墳時代初期に利用された遺跡群と無遺物層となっている遺跡群とに分け、前者を「第Ⅰ類型」、後者を「第Ⅱ類型」と呼んだ。そして、五条川と庄内川とに囲まれた低地帯の一部に第Ⅱ類型の遺跡が多いと類推した（第3図）。

地質概説

濃尾平野の沖積層は更新統最上部の濃尾層と完新統の南陽層とに区分される。完新統堆積物は臨海部のボーリング資料をもとに松沢・嘉藤（1954）や古川（1972）により南陽層と呼ばれ、下部粘土層・上部砂層・最上部粘土層に区分されている。木曾川デルタの堆積過程について、海津（1994）は10,000～8,500年前の緩慢な海進ステージ、8,500～6,500年前の急激な海進ステージ、6,500～5,500年前の累重的堆積ステージ、5,500～現在の前進的堆積ステージの4つのステージに区分した。後氷期の海進（繩文海進）以降、伊勢湾に臨む三角州は沖合への急速な前進付加堆積を進行させた。その前置層および前置斜面前縁部の堆積物が上部砂層である（海津、1994）。調査地域地下には厚層十数mの粗粒砂層が存在し、周辺に多くの自然堤防をもつことからも、後背地から三角州へ碎屑物を供給する河川の存在が示唆される。歴史時代に入ってからは、主に古木曾川水系流路の側方移動やジャンブによる環境変化を反映する堆積物により構成されている。

文献

- 古川博志、1972、濃尾平野の沖積層-濃尾平野の研究、その1-、地質学論集、7、39-59。
伊藤秋男、1998、尾張低地帯における遺跡立地の二つの類型（覚書）、弥勒寺御申塚道路発掘調査報告書、南山大学大学院考古学研究室、49-54。
国土地理院、1968、2万5千分の1土地条件図「桑名」「名古屋南部」「津島」「名古屋北部」「大垣」「岐阜」「農田」および土地条件調査報告書（中京地区）、166p。
松沢 熊・嘉藤良次郎、1954、名古屋付近の地質同地質圖、愛知県、35p。
森山昭雄、1972、沖積平野の微地形、地質学論集、7、197-211。
多田文男・井間弘太郎、1955、濃尾平野の地形構造と地盤沈下、総理府資源調査会、82p。
海津正徳、1994、沖積低地の古環境学、古今書院、270p。

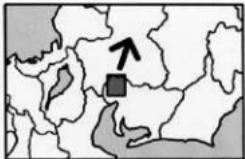


第5図 遺跡の立地環境

第3図 踏査した遺跡の立地形態 (■第Ⅰ類型、●第Ⅱ類型)

■自然堤防 ▲緩斜状地 ■台地

1. NTT一宮局遺跡 (仮称)
2. 大毛池田遺跡
3. 門間沼遺跡
4. 西上免遺跡
5. 八王子遺跡
6. 山中遺跡
7. 権現山遺跡
8. 朝日遺跡 (資料館南地点)
9. 月絆手遺跡
10. 高塚古墳
11. 弥勒寺御申塚遺跡
12. 龍田旭古墳



第3節 歴史的環境

三ツ井遺跡は、縄文時代に始まり、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代など、各時代を通じて人間活動の痕跡が残されていた。本遺跡の周辺にも各時代、数多くの遺跡が存在している。そこで、本遺跡を中心に主な周辺の遺跡を時代順に紹介する。

縄文時代

縄文時代の遺跡として、早期では、北東6.5kmに北替地遺跡、東5kmに織田井戸遺跡、中期では、北3kmに佐野遺跡、東南東1.5kmにノンベ遺跡、後期では、南東南1kmに椎現山遺跡、晚期では、北西2.5kmに馬見塚遺跡、西北西5kmに下り松遺跡、西南西1kmに池之上遺跡などがある。

弥生時代

弥生時代の遺跡として、前期では、南1kmに元屋敷遺跡、北島白山遺跡、西北西2kmに弥勒遺跡、中期では、東1.5kmに大地遺跡、南1.5kmに伝法寺野田遺跡、後期では、東北東1.5kmに蕪池遺跡、西7kmに山中遺跡などがある。また、著名な朝日遺跡は南6.5km、八王子遺跡は西北西6.5kmに位置する。

古墳時代

古墳時代の遺跡として、前述の元屋敷遺跡、椎現山遺跡、北北東2kmに平松遺跡、南南西700mに方墳と推定される稲荷山古墳などがある。

古代

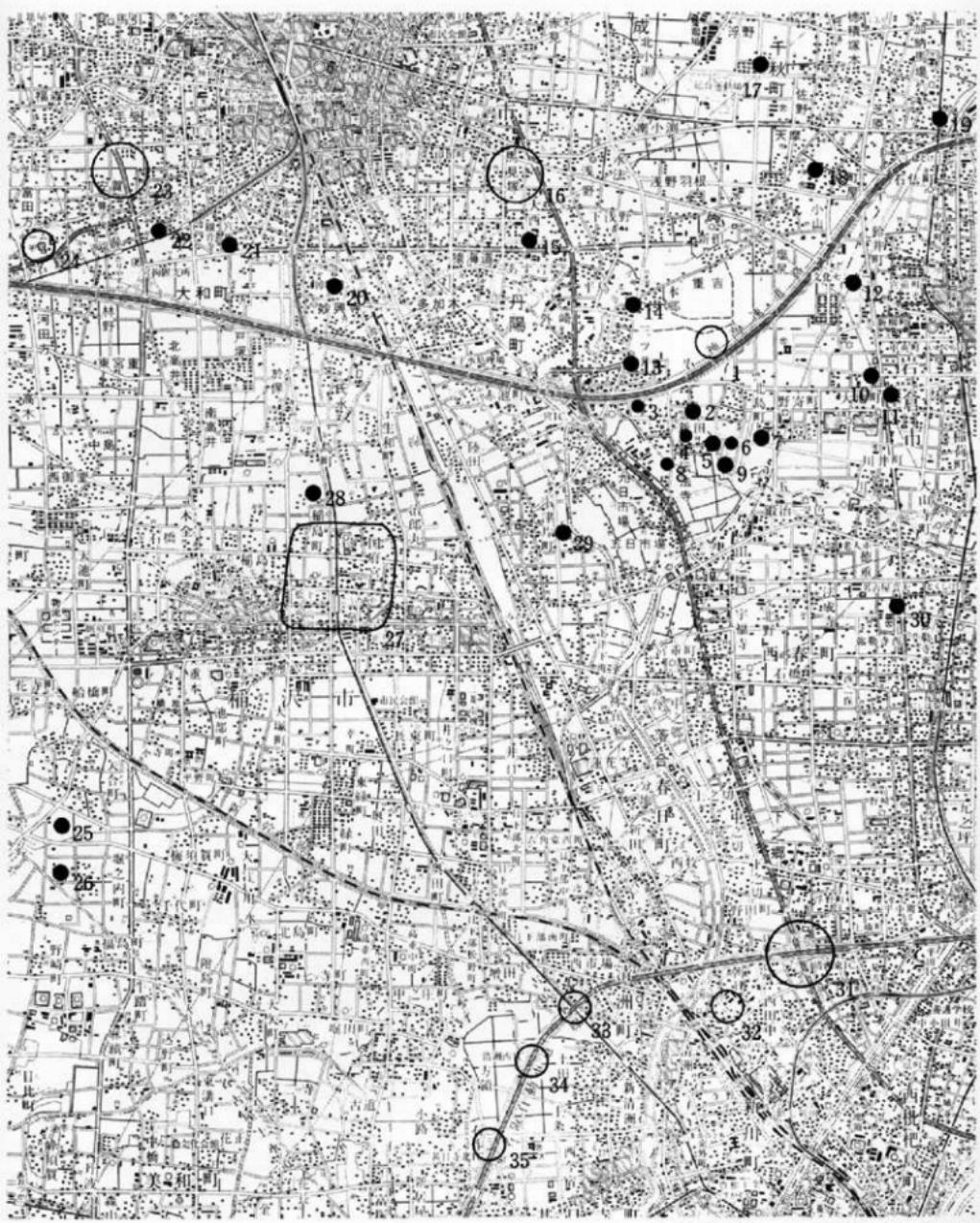
古代の遺跡として、南南西1.5kmに「平」の角印を押した須恵器の碗出土の西大門遺跡、西1kmに「下乃」と箋書きされた灰釉陶器皿出土の茂八枚遺跡などがある。また、南南西1kmに伝法寺庵寺、北東3.5kmに長福寺庵寺、西4kmに妙興寺庵寺、西南西4.5kmに東畠庵寺などの古代寺院跡があり、西南西4.5kmに尾張国府跡推定地がある。

中世以降

中世以降の遺跡として、西北西1kmに尾藤源内居城と伝えられる重吉城跡、南西2.5kmに下津城跡、東3kmに岩倉城跡などがある。

その他、主な周辺の遺跡については、第6図に示した通りである。

1 三ツ井遺跡	11 ノンベ遺跡	21 下り松遺跡	31 朝日遺跡
2 稲荷山古墳	12 蕪池遺跡	22 北川田遺跡	32 清瀬城下町遺跡
3 池之上遺跡	13 茂八枚遺跡	23 八王子遺跡	33 鶴間遺跡
4 伝法寺庵寺	14 重吉城跡	24 山中遺跡	34 土田遺跡
5 元屋敷遺跡	15 弥勒遺跡	25 尾張国分寺跡	35 阿弥陀寺遺跡
6 北島白山遺跡	16 馬見塚遺跡	26 堀之内花ノ木遺跡	
7 椎現山遺跡	17 佐野遺跡	27 尾張国府跡推定地	
8 西大門遺跡	18 平松遺跡	28 東畠庵寺跡	
9 伝法寺野田遺跡	19 長福寺庵寺	29 下津城跡・下津城下層遺跡	
10 大地遺跡	20 妙興寺庵寺	30 弥勒寺御申塚遺跡	



国土地理院発行 1:50000地形図(名古屋北部)使用

第6図 周辺の遺跡 (三ツ井遺跡付近は詳細掲載)

- 文献資料** 次に、文献資料などから当地域を概観してみる。
- 古代律令制下** 古代律令制下の当地域は、尾張国丹羽郡に属していたと推察される。前述の茂八枚遺跡出土の灰釉陶器皿に菟書きされた「下乃」を地名と解し、現一宮市丹陽町三ツ井を中心とした地域を「和名抄」にみえる郡内の12の郡のうち、丹羽郡下沼（しもの）郷と推定する説もある。¹⁾
- 島畠の形成** 金田章裕氏は、様々な文献史料を中心とした検討結果などから、尾張地域の島畠景観の形成起源を中世の13～14世紀頃に推定している。²⁾
- 地名の初見** 遺跡の所在する「重吉」の地名は、嘉慶2年（1327年）の「菟尾宗顕譲状」に「重善寺町参段」と見えるものが初見史料である。応永4年（1397年）正月の「尾張国目代光守注進状」に「重吉六恩寺内、閑口殿、子細同前」、同年12月5日の「尾張國在序等注進状」に「重吉 閑口殿御領」と見え、「閑口殿」の知行地が「重吉」にあったことがわかる。天正11年（1583年）の「織田信雄判物」に「ミツ井」、「しきいし」と見え、これが「三ツ井」の地名の初見史料である。また、天正12～14年の知行形態を示す史料と考えられる「信雄分限帳」に「ミツ井しきいし郷」と見える。³⁾
- 妙興寺の創建** 本遺跡より西4kmに位置する妙興寺の創建は、貞和4年（1348年）といわれているが、創建以前よりこの地は妙興寺という地名でよばれていた。⁴⁾
- 三井重吉城** 三井重吉城は、諸書ともに尾藤源内の居城と伝える。「信長公記」によれば、尾藤源内は、元亀元年（1570年）9月、森可成の軍に属し、浅倉・浅井軍と戦い、近江坂本で討死したと見える。また、尾藤源内の子孫を称する桑山氏の「系図」によると、尾藤源内重吉は信濃の小笠原長時に属していたが、小笠原家没落の後、大永年中（1521～28年）に信濃より「三井」に移り築城し、永禄年中（1558～70年）、織田信長の為に落城したが、三河奥平美作守信昌に属し、同国見代で甲州勢と戦い、討死したとある。⁵⁾「三河国二葉松」に設楽郡（設樂郡）赤羽根村古屋敷、「美藤源内」と見える。作手村に美藤源内の墓と伝えられる石祠があり、柳源寺の過去帳に「寛翁仁信居士 天正元年 八月廿二日 奥平仕官美藤源内事」とある。美藤源内と尾藤源内は同一人物であると思われる。桑山氏の「系図」によると、源内の三男の清兼は、三ツ井村に帰り、初め青木川の地名より青木善右衛門清兼と名乗り、豊臣秀吉に仕えていたが、のちに母方姓の「桑山」に改めたと伝える。また、「金鏡九十九之巻」の著者である桑山好之は同著書の中で、高祖を尾藤源内として「尾州丹羽郡三ツ井古城主也」と記している。桑山氏の「系図」も三男の清兼の二男の金左衛門から五代目に桑山好之の名を記している。⁶⁾
- 小牧・長久手の戦い** 天正12年（1584年）8月～9月にかけての「小牧・長久手の戦い」に関係する史料に「三ツ井」、「重吉」の地名が散見されるようになる。「家忠日記」の天正12年（1584年）9月7日の条に「無事の渉汰され候て、茂吉へ惣人數うつし候」と見え、同年9月8日の「徳川家康書状」に「如來意和与之儀、事切候て、昨日至当地茂吉寄陣候」と見えることなどから、小牧・長久手の戦いの際、徳川家康が豊臣秀吉との和議の交渉決裂後、「茂吉（重吉）」に布陣したことがわかる。また、豊臣秀吉も「三ツ井」、「重吉」に布陣したとする史料も

ある。「小牧・長久手の戦い」関係史料については、第2表を参照。

対文12年（1672年）の「対文村々覚書」や文政5年（1822年）の「尾張徇行記」などに、「三ツ井」、「重吉」の地名は、「三井重吉村」として記載されている。また、「信雄分限帳」に「ミツ井しけよし郷」と見え、「尾張徇行記」の旧丹羽郡「三井重吉村」の部分に「此三井重吉村ハ、元来二ヶ村ニテ村落モ二区ニナリ來レリ、然レトモ往古ヨリ二名ヲ井セテ一村トナシ、対文覚書ニモ三井重吉村トアリテ高モ總括シテトリアツカヒ來レリ」と見えることなどから、明確な時期は不明であるが、江戸時代以前より「三井重吉村」として取り扱われていたものと考えられる。

註

- 1)『新編 一宮市史』本文編上 一宮市 1977年
- 2)金田幸裕 「条里地割内部における島畠景観の形成」『条里と村落の歴史地理学研究』 1985年
- 3)『新編 一宮市史』史料編五 一宮市 1963年 妙興寺文書 14号文書
- 4)『新編 一宮市史』史料編六 一宮市 1970年 醍醐寺文書 397号文書
- 5)『新編 一宮市史』史料編六 一宮市 1970年 醍醐寺文書 398号文書
- 6)『新編 一宮市史』史料編六 一宮市 1970年 生駒秋彦氏所蔵文書 215号文書
- 7)『新編 一宮市史』史料編補遺二 一宮市 1980年 114号文書
- 8)前掲1)
- 9)「対文村々覚書」、「尾州古城志」、「張州府志」、「尾張志」、「尾張徇行記」など
- 10)太田牛一 「信長公記」（奥野高廣・岩沢恩彦校注『信長公記』1969年）
- 11)「尾頭（藤ヶ）氏桑山系図」（一宮市史料目録 増補改訂版 歴史 367）
- 12)佐野監物 「三河国二葉松」 元文5年（1740年）（久曾神昇ほか編『近世三河地方文献集』 1980年）
- 13)『作手村誌』 作手村誌編纂委員会 1982年
- 14)桑山好之 「金輪九十九之巻」（『名古屋叢書』第六~八巻（第七巻部分）所収）
- 15)松平家忠 「家忠日記」（竹内理三編 「増補続史料大成」 第19巻所収）
- 16)『新編 一宮市史』史料編六 一宮市 1970年 横橋二郎一氏所蔵文書 602号文書
- 17)『岩倉市史』 上巻 岩倉市 1985年
- 18)「対文村々覚書」（『名古屋叢書続編』 第一~三巻（第二巻部分）所収）
- 19)横口好古 「尾張徇行記」（『名古屋叢書続編』 第四~八巻（第六巻部分）所収）

「小牧・長久手の戦い」関係史料（天正12年）（文字は原文とおり）

- (九月) 六日 無事の沙汰候。
七日 無事のきれて、茂吉へ惣人數御うつし候。
十七日 敵陣之くつろけひきのき候。
廿七日 家康清須迄御馬被入候。
(九月の条に、矢が刺さった馬と二羽の鷺の挿図あり)
- 八月秀吉公尾州中通奈良表江出張、取出を五三箇所有普請、家康公自清須出向、しげいしに令居陣給、信雄同之、據て秀吉陣に給間、家康も清須江入馬給。
- 同年八月下旬の事なるに秀吉十六万騎之着到にて、至于尾州參陣、二宮山へ上らせ給ひけり、上奈良村より五郎丸至久地三井重吉近辺不余尺地陣とらせ給ふ、信雄郡ハ郡村に對陣、家康ハ小牧山におはしけり、翌日より、上奈良村河田村大野村三ヶ所、要害の普請はしめ有、九月下旬大かた出來せしかば、其城主を定られ、兵權以下丈夫に沙汰し置、十月三日大神まで人數を打納給ふ、其より直に至于勢州御參陣有、
- 八月下旬、秀吉公發大軍出尾州取上二宮陣、上奈良五郎丸尾口三井、信雄ハ郡村、家康ハ被陣小牧上奈良川田大野ニ構要害入置城主、
- 八月、秀吉尾州中通奈良表へ出張、取出ヲ五三箇處有普請、此秀吉ノ取出ハ、上奈良村・河田村・大野村等也、
家康公自清須出向、茂吉ニ令居陣給、信雄同之、一説、廿八日、秀吉樂田辺ヲ放火ス、
公清須ヨリ岩倉ニ移給、又一説、此時信雄ハ郡村に被陣取、九月七日、秀吉茂吉ニ陣ヲ移ス、
公路ヲツケテ御對陣、
九月十七日、秀吉兵ヲ引テ濃州へ退、家康公モ清須へ入馬給、同廿七日、公清須ヘ御帰、
- (九月) 七日 秀吉移陣於茂吉、公驅跡、相對面陣、
十七日 敵引兵而退、
二十七日 公返清須
- (八月) 廿一日秀吉進テ丹羽郡上奈良村五郎丸久地三井茂吉ニ兵ヲ賦ス、信雄ハ秀吉ヲ進ヘ郡村ニ陣ヲ設ケ、神君ハ尚小牧山ニ屯セラレ奈良村近邊水石ニ砦ヲ築カル、
(九月) 七日秀吉茂吉ニ陣ス、神君信雄ハ是ヲ追テ茂吉ニ到リ玉フ、
十七日 …秀吉且怒り且勝難キヲ察シ今夜陣ヲ退事數里、神君ハ敵ノ返り討事ヲ慮リ玉ヒ尚茂吉ニ堂々ト陣ヲ設ケ玉フ
- (八月) 同二十七日、秀吉樂田山ニ陣取、燒築アリ、同二十八日、源君信雄モ岩倉ヘ御出馬、
重吉ニワイテ秀吉ト對陣、九月十七日、秀吉美濃ヘ帰陣、同二十七日、源君并信雄清須ヘ
帰城シ玉フ、
- (八月) 廿一日秀吉軍ヲ進テ丹羽郡上奈良村五郎丸久地三井茂吉ニ兵ヲ分ケ備フ、
(九月) 七日秀吉本陣ヲ二ノ宮山へ出シ總軍五郎丸久地三井或ハ茂吉ニ出張ス、神君信雄トモニ兵ヲ勤メ茂吉ニ陣シ玉フ、十七日 …秀吉大ニ慄ル然レトモ、神威ヲ惑シ争戰ノ勝利持シ難カラント思惟シ夜ニ及シテ數里陣ヲ引ク、神祖追討ント思慮シ玉トモ秀吉ノ返り頃シコトヲ察シ玉ヒ猶茂吉ニ陣シ玉フ、
- 九月、(秀吉) 軍茂吉、數親親東郷、以其勢不可当、又退體成於諸塞而還大坂
- 九月、秀吉軍于宮山、出兵於五郎丸久地三井茂吉、公暨信雄移師于茂吉、
- 九月、信雄与東照宮徒師于茂吉、
- 「家忠日記」
『増補続史料大成』第19卷
- 「當代記」「史籍雜纂」第二
- 「太閤記」「改定史籍集覽」第六
- 「農臣記」中巻「統群書類從」
卷五百八十四（第二十輯上）
- 「創業記考異」「内閣文庫
『長久手町史』資料編六
中世 長久手合戦史料集
- 「御年譜」二 蓼左文庫
『長久手町史』同前
- 「武徳編年集成」上巻
卷之三十
- 『武家事記』巻二十
- 『大三川志』巻二十三
- 『野史』巻四十七 羽柴秀吉
- 『野史』巻五十三 東照公
- 『野史』巻六十九 織田信雄

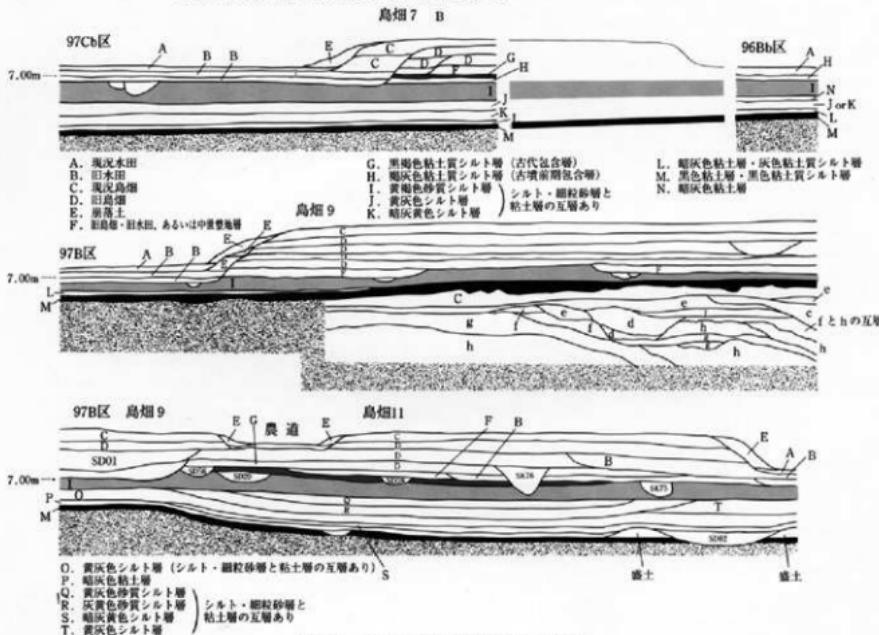
第7図 重吉村絵図（天保12年 原寸84.5mm×63.5mm「新編一宮市史」資料編9）

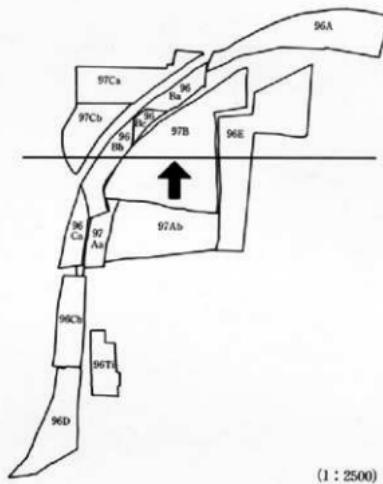
第8図 三ツ井村絵図（天保12年 原寸104×82.5cm「新編一宮市史」資料編9）

第2章 遺構

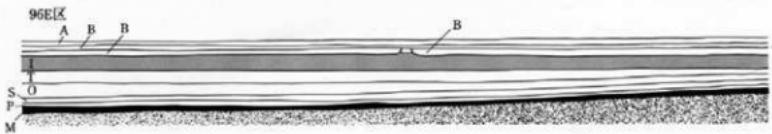
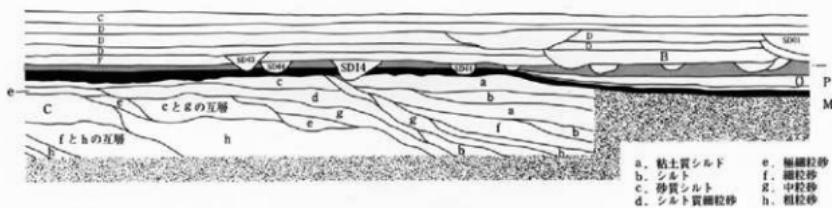
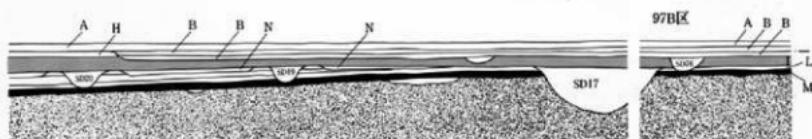
第1節 遺跡の基本層序

遺跡の基本層序は、旧地形が微高地で現況畠地の場合、第1層：耕作土（近世～現代島畑）、第2層：褐色シルト層（中世島畑）、または黄褐色シルト層（中世整地層か）、第3層：暗褐色粘土質シルト層（中世包含層か）、第4層：黒褐色粘土質シルト層（古代包含層）、第5層：褐灰色粘土質シルト層（古墳前期包含層）、第6層：黄褐色砂質シルト層（無遺物層であり、さらに細分化される。）、第7層：暗灰黄色シルト層、第8層：灰色粘土質シルト層、第9層：黒色粘土質シルト層、第10層：黄灰色砂質シルト層（またはシルト質細粒砂層）である。旧地形が低湿地部（谷部分）の所では、微高地の堆積に比べて、第6・7層部分にシルト・細粒砂で構成されるラミナ部分と粘土層との互層が繰り返しがられる。また、第8層が暗灰色粘土層、第9層が黒色粘土層、第10層が緑灰色粘土層となり、第9層直上に薄い砂層が堆積している所もある。





(1 : 2500)



■ 第4層(古代包含層) ■ 第6層 上層 ■ 第9層(黒色粘土層・黒色粘土質シルト層)

第2節 遺構の概要と時期区分

時期区分

(1) 時期区分

調査の結果、本遺跡は縄文時代後期前葉から多少の断続はあるものの各時代にまたがる複合遺跡であることが明らかとなった。検出された遺構は、遺構の変遷から下記のように大きく8つの時期に区分して考えることができる。

- ① 縄文時代Ⅰ期：縄文時代後期前葉
- ② 縄文時代Ⅱ期：縄文時代後期中葉末～晚期中葉
- ③ 弥生時代Ⅰ期：弥生時代前期
- ④ 弥生時代Ⅱ期：層序より③～⑤の間（弥生時代前期～後期の間）に推定される時期（時期決定可能な遺物が出土していない。）
- ⑤ 弥生時代後期～古墳時代
- ⑥ 古代
- ⑦ 中世Ⅰ期：中世前半（鳥畠景観形成以前）
- ⑧ 中世Ⅱ期以降：中世後半以降（鳥畠景観形成以後）

遺構検出

遺構検出は、中世以降は前節で記載した第3層～第6層直上で、古代は第4層～第6層直上で、弥生時代後期～古墳時代は第5層・第6層直上で行なった（以上、検出Ⅰ）。

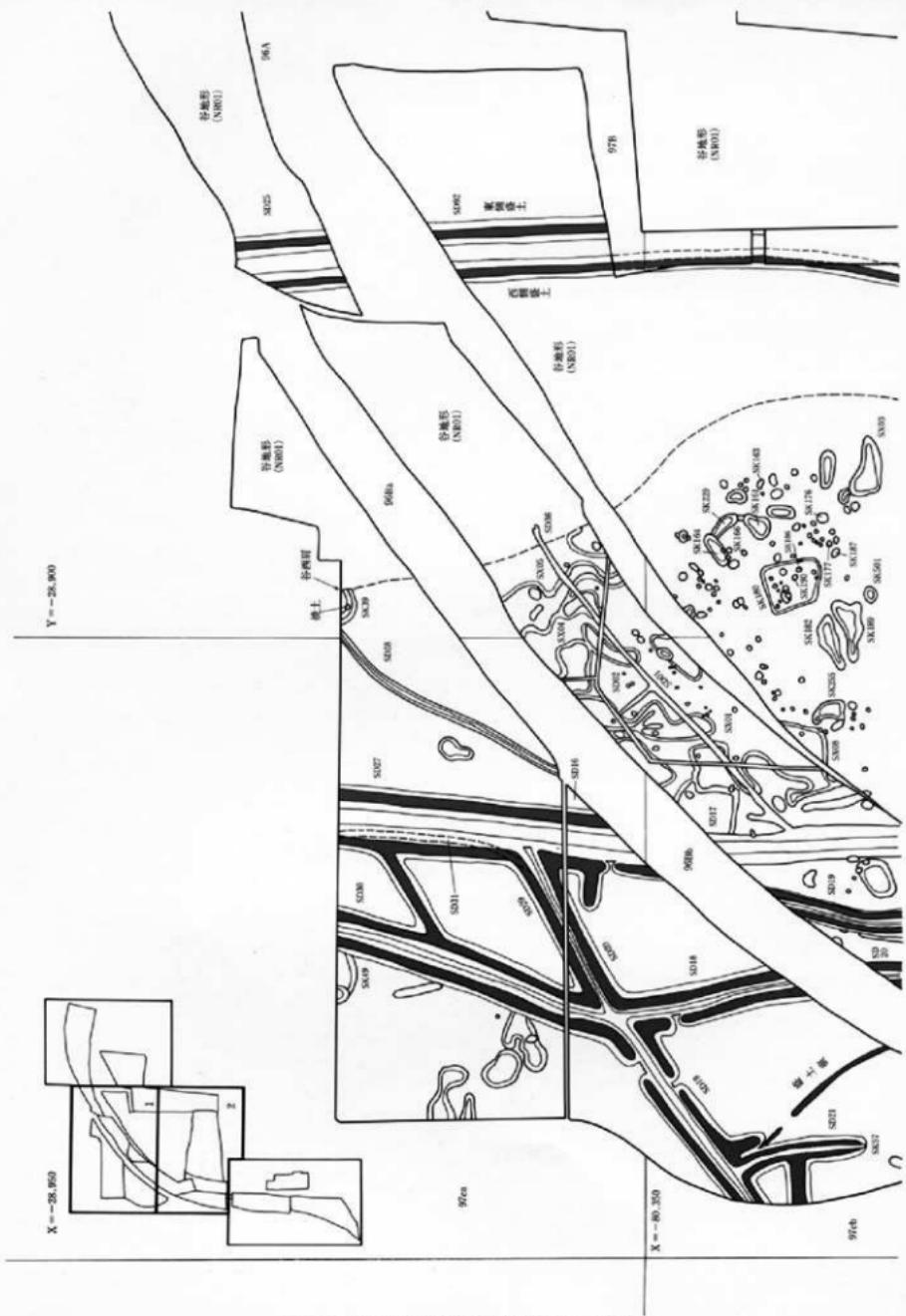
弥生時代Ⅱ期は第6層がさらに細分化される各層及び第7層・第8層直上で行なった。縄文時代Ⅱ期及び弥生時代Ⅰ期の遺構の多くは、遺構埋土が近似する第9層（黒色土層）の層位中に展開し、遺構の検出がきわめて困難であった。そこで第9層直上で一度検出した（以上、検出Ⅱ）後、土層観察用のベルトを残して、第9層を掘削し、第10層直上で行なった（以上、検出Ⅲ）。このため、第9層に掘り込まれた遺構は明瞭さを欠くものが多くなってしまった。また、遺物が集中して出土したり、立位で出土したものもあり、出土状態から遺構出土の可能性が考えられたため、遺物を取り上げる際、できる限り出土地点の座標値とレベル値を計測した。縄文時代Ⅰ期の遺構検出も、第10層直上で行なった。

遺構の概要

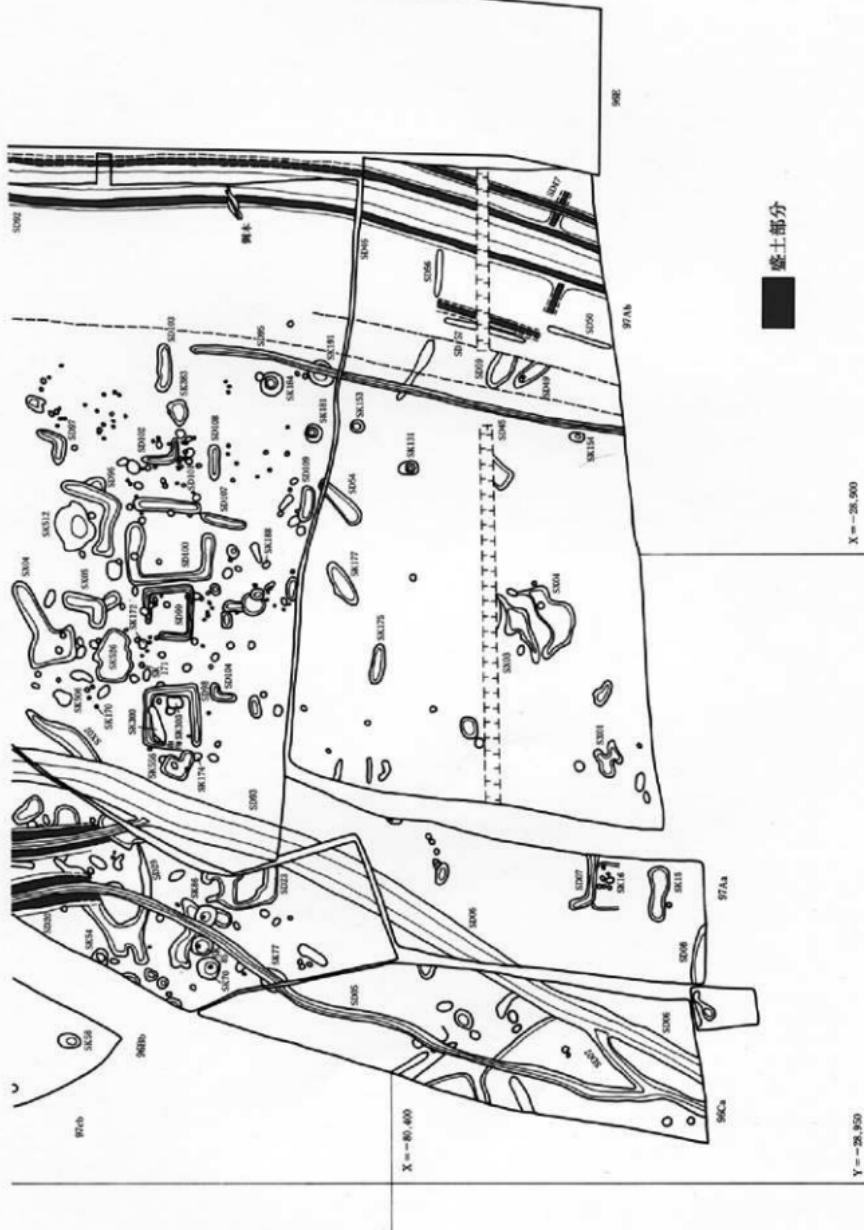
今回の調査において最も注目できる点は、弥生時代前期の水田跡の検出があげられる。平成9年度の調査段階で、その可能性は考えられたが、慎重を要する遺構のため、諸氏に現場調査中及び現場調査終了後にご指導・ご教示を賜り、自然科学分析結果を得て、遺構認定に至った。また、弥生時代前期の居住域と墓域に関連する遺構も検出された。その他、縄文時代の配石遺構・古墳時代・古代の居住域に関連する遺構・中世前半の墓域に関連する遺構・中世後半以降の鳥畠・水田に関連する遺構などがあげられる。（検出された鳥畠遺構・水田遺構は、幾度とない改変を受け、複雑で遺構数も膨大であった。そこで、96A区・96D区の一部（近世以降の水田遺構）を除き、個々の遺構番号を省略し、旧鳥畠・旧水田と呼称して調査を行なった。本書でも旧鳥畠・旧水田と呼称して取り扱うこととする。）

関連する時代区分		出土した土器編年型式 (対比・併行資料含む)		三ツ井遺跡の時期区分
縄文	後期	前葉	北白川上層式Ⅰ期 北白川上層式Ⅱ期	縄文時代Ⅰ期
		中葉	遺物未確認	遺構未確認
		元住吉山Ⅰ式		
		後葉	元住吉山Ⅱ式 宮滝式 寺津下層式	(黒色土層の段階的堆積開始)
		前葉	寺津式	縄文時代Ⅱ期
		元刈谷式		
	晩期	中葉	稻荷山式	
		後葉	遺物未確認	
		前葉		遺構未確認
		元刈谷式		
弥生	前期	中葉	稻荷山式	
		後葉	遺物未確認	遺構未確認
	中期	尾張編年Ⅰ～Ⅱ期		弥生時代Ⅰ期
		遺物未確認		弥生時代Ⅱ期
	後期	山中式後期		弥生時代後期
古墳	前期	廻間Ⅰ式～廻間Ⅱ式		古墳時代前期①②
		遺物未確認		(古墳時代前期包含層の堆積)
		松河戸Ⅰ式		古墳時代前期③
	中期	遺物未確認		遺構未確認
		東山61号窯式		古墳時代後期
古代	後期	遺物未確認		遺構未確認
		東山50号窯式～		古代
		折戸10号窯式～黒錦90号窯式		
	飛鳥	(古代包含層の堆積)		
		折戸53号窯式～百代寺窯式		遺構未確認
中世	鎌倉	尾張型 第4型式 第7型式	東濃型 窯洞窯式 	中世Ⅰ期
	室町		生田窯式	(島畑景観の形成) 中世Ⅱ期

第3表 三ツ井遺跡の時期区分表

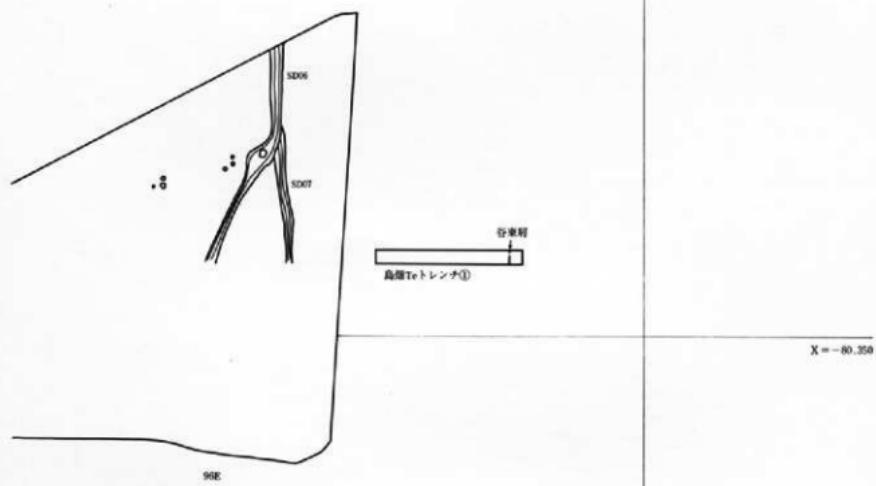
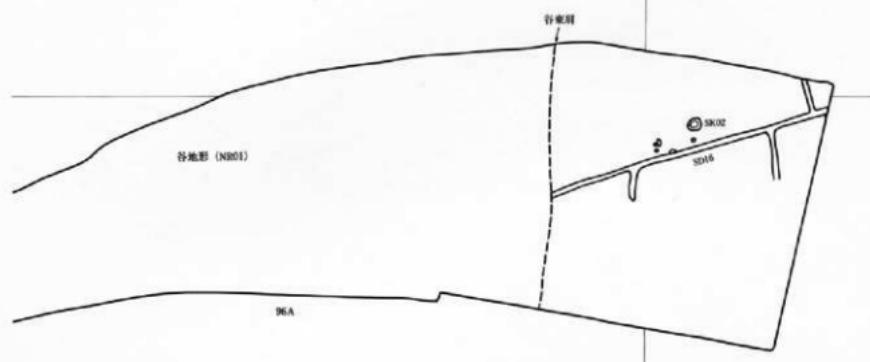


第10図 弥生時代Ⅱ期以前の基本造構図(1) (1:400)

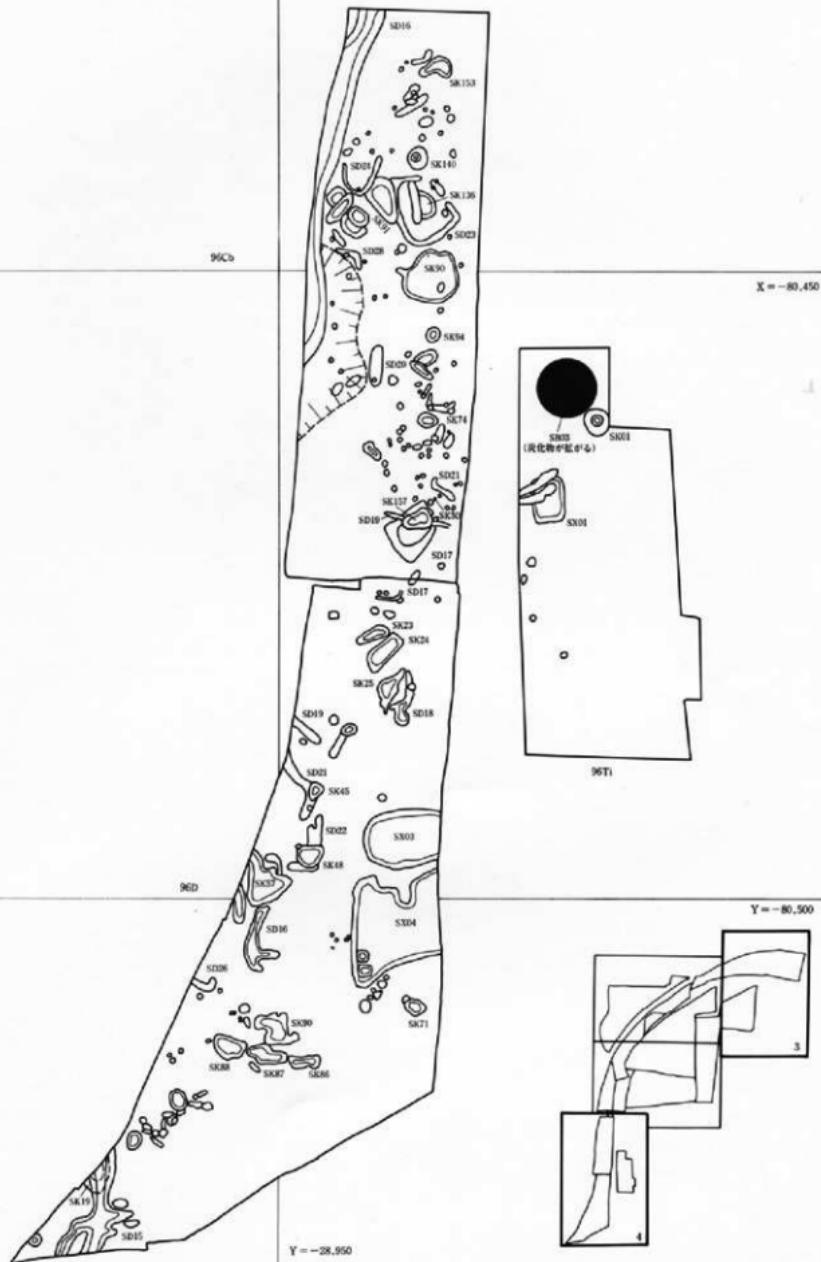


第11図 弥生時代初期以前の基本造構図(2) (1 : 400)

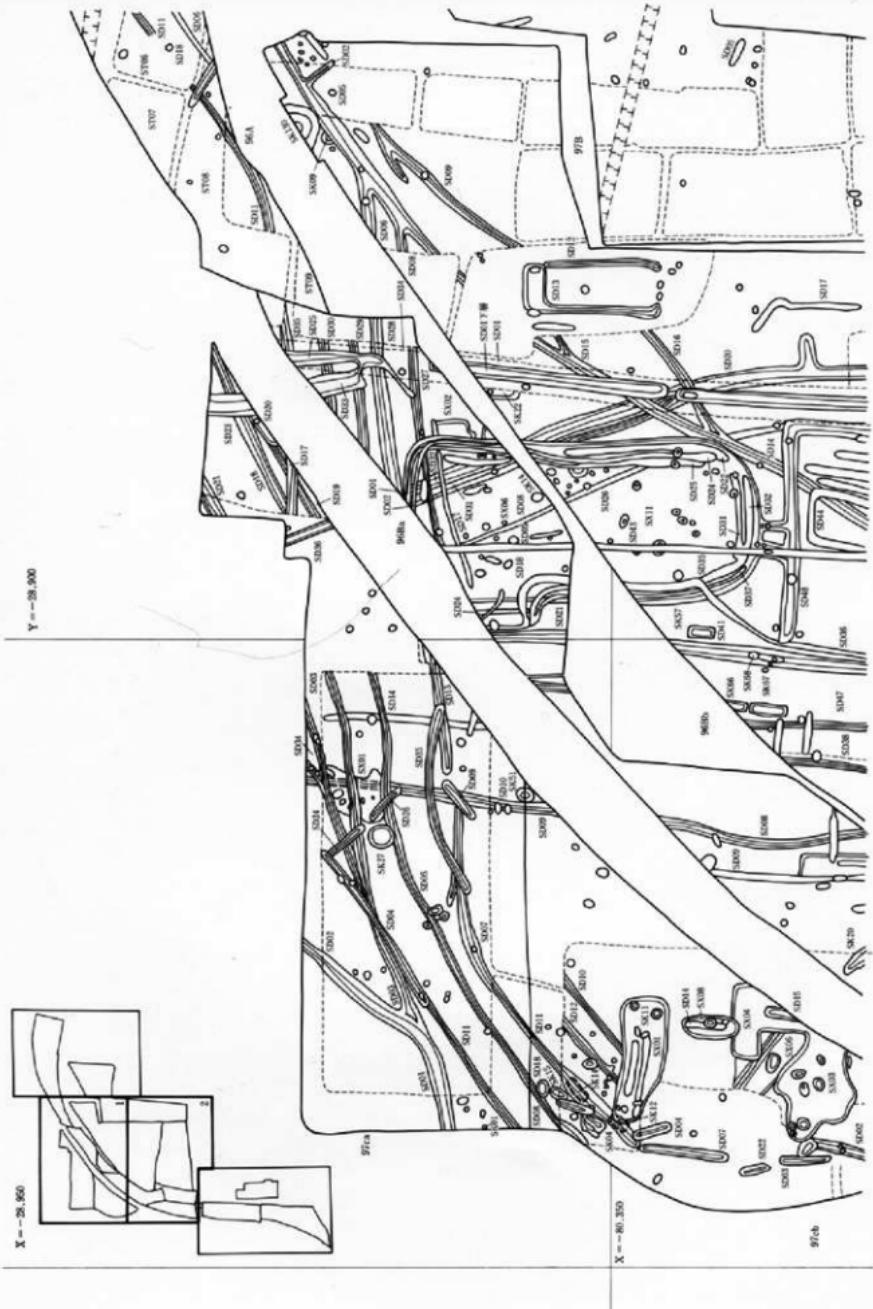
Y = -28.800



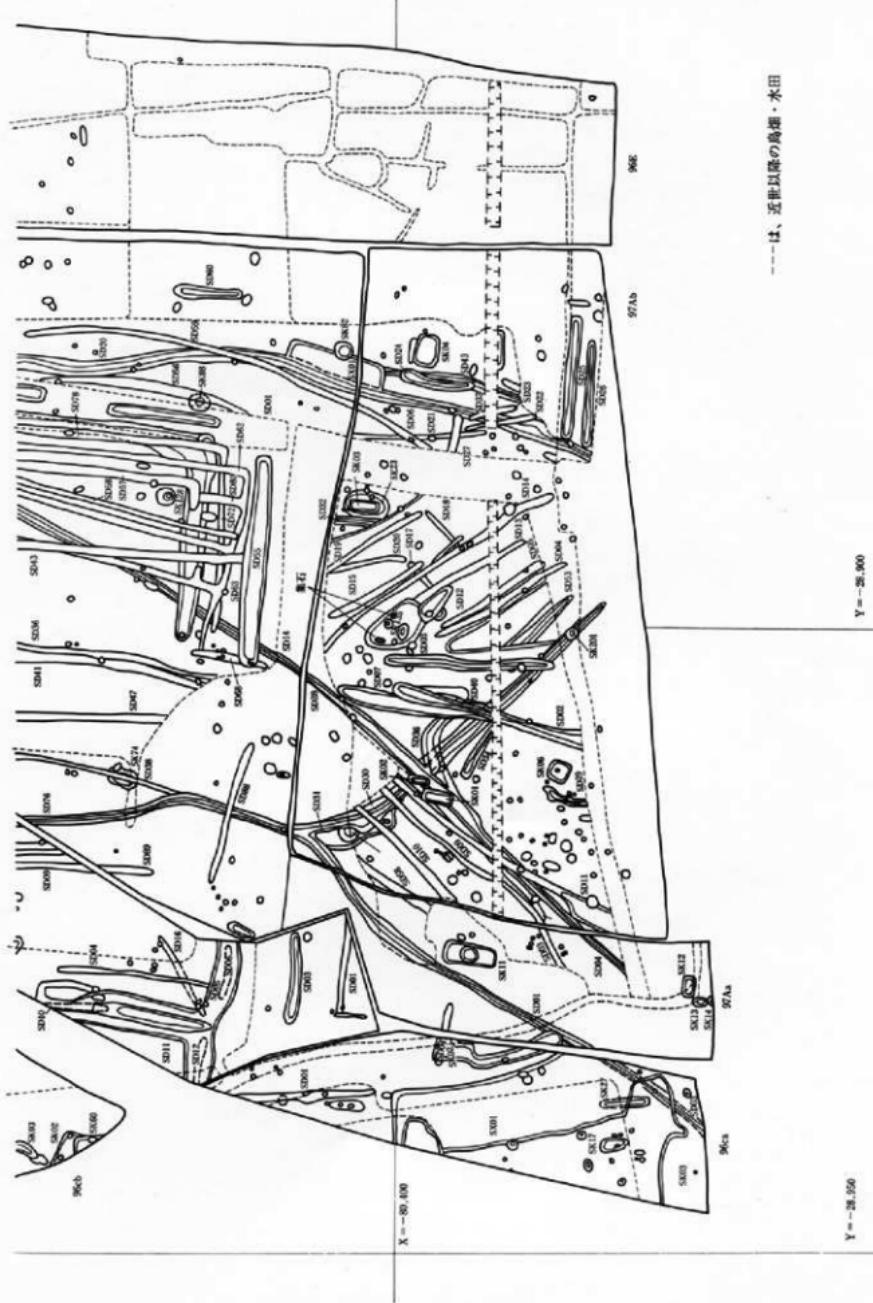
第12図 弥生時代Ⅱ期以前の基本構図(3) (1 : 400)



第13図 弥生時代Ⅱ期以前の基本遺構図(4) (1 : 400)

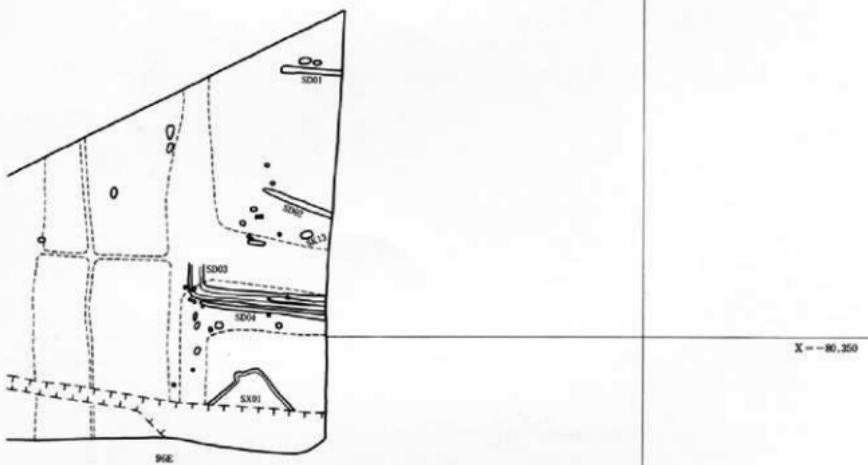
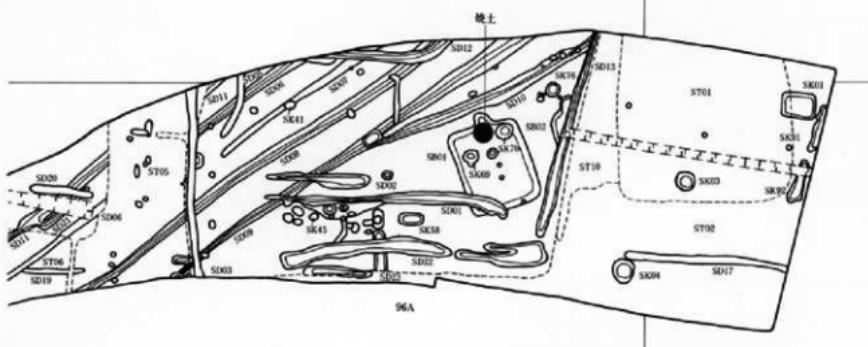


第14図 弥生時代後期以降の基本構造図(1) (1 : 400)



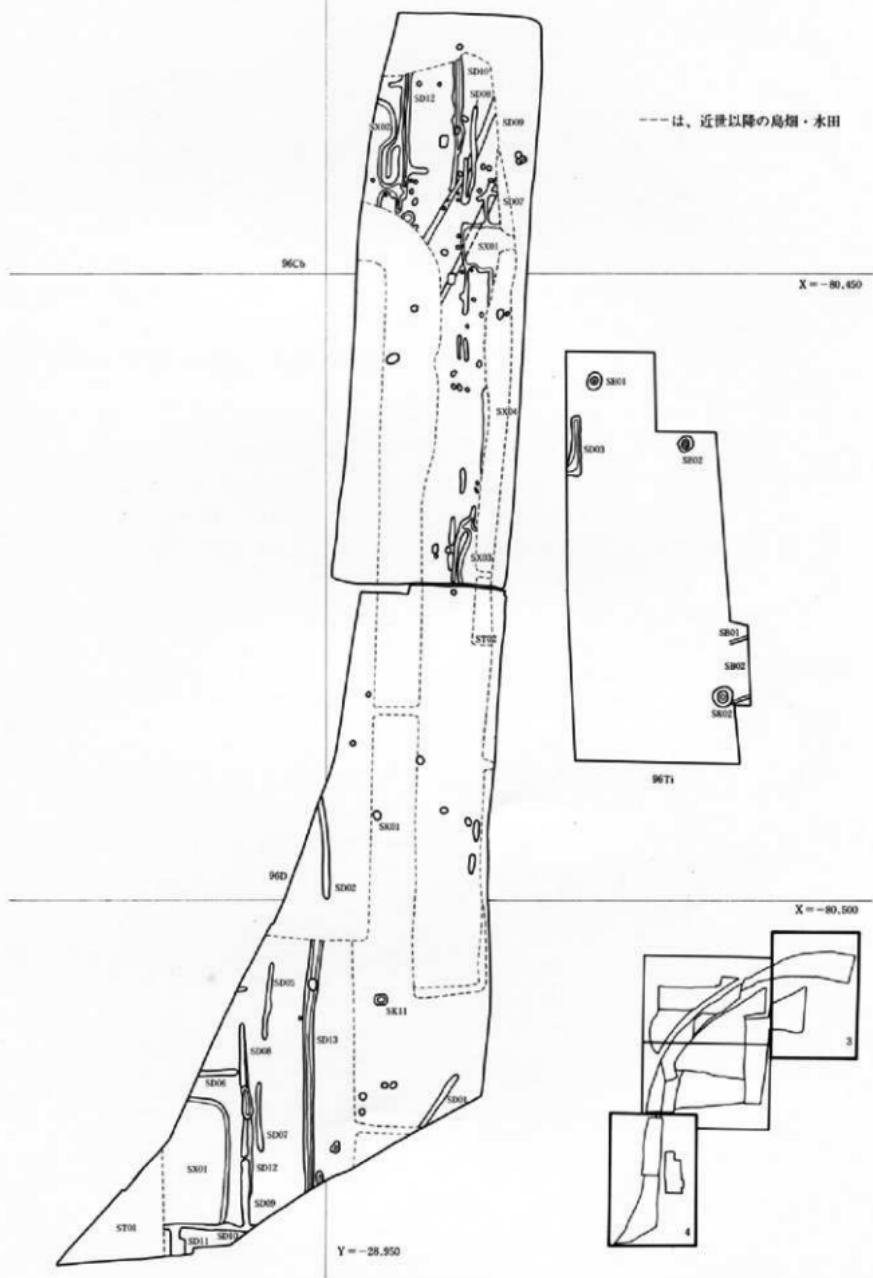
第15図 弥生時代後期以降の基本造構図(2) (1 : 400)

Y = -28,890



第16図 弥生時代後期以降の基本造構図(3) (1:400)

---は、近世以降の島畠・水田



第17図 弥生時代後期以降の基本遺構図(4) (1 : 400)

第3節 各時期の遺構

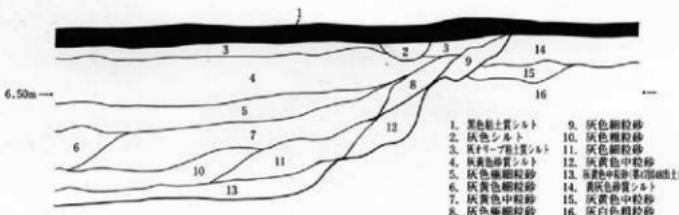
1. 縄文時代

縄文時代Ⅰ期 (1) 縄文時代Ⅰ期

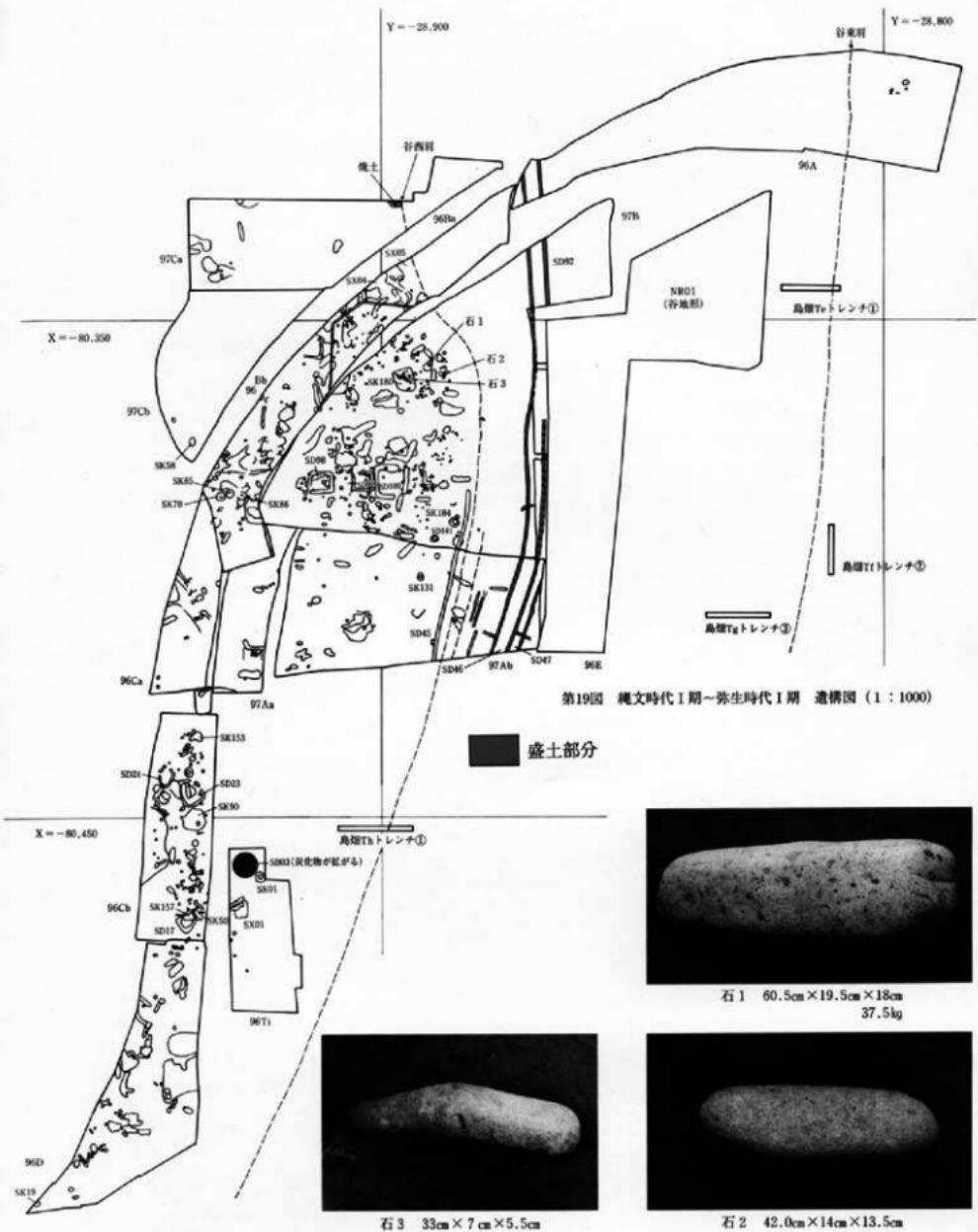
後期前葉の遺構としては、97B区の微高地上に土坑群（97B SK176・180・186・187・188・190など）を検出した。遺物は、深鉢・石錐・磨製石斧などが出土した。後期前葉の土器のはほとんどが97B区の微高地上及びその周辺で出土している。また、人為的に運ばれ、配されたと推察される長さ30~60cm程の自然石が4点確認された。そのうち最大のものは、一辺20cm・長さ60cm程で直方体を呈している。出土状態は、いずれも横置であったが、立柱状態あった可能性も想定される。その後、河川の流れに変化が生じ、幅約80m、最大高低差約1mの谷地形が形成され、地形全体に黒色土層（黒色粘土層・黒色粘土質シルト層）が段階的に堆積したと考えられる。97B NR01西端の黒色土層下約1.2mの地点の砂層から深鉢が2点（第47図48と49の破片）出土し、そのうち1点（第47図49と接合した土器片）は、洪水により埋没した立ち木脇の砂層から出土している。

縄文時代Ⅱ期 (2) 縄文時代Ⅱ期

後期中葉末から晩期中葉の土器・石器類が黒色土層及びその下位層より出土しているが、この時期の遺物量は相対的に少なく、遺構に伴うものは晩期中葉のものと推察される。先述したように、この時期の遺構検出は困難であり、弥生時代Ⅰ期の遺構との判別も難しかったが、96Ba・Bc区の溝状遺構（96BaSX04・05など）や96Cb区のSK90、97B区の小土坑群などが主な遺構としてあげられる。96Ba区の溝状構造埋土などからイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が検出されたことから、付近で稲作が行なわれた可能性が高まったが、今回の調査ではこの時期の明確な水田遺構は確認できなかった。主な遺物としては、深鉢・浅鉢・石錐・石錐・スクレーパー・垂齒などがあげられる。また、97B区の微高地上で、石器製作によって生じたと推察される剥片が多く出土し、原石も出土した。石材は下呂石が多く、他にチャート・サスカイトの剥片も出土している。この微高地上で、弥生土器はほとんど出土せず、縄文土器の出土量は、他の地点よりも多い。縄文時代の遺構も確認されていることから、縄文時代の石器製作の場が想定される。



第18図 97B NR01下層（黒色土層堆積前）断面図（1:40）



第20図 純文時代Ⅰ期の石、出土状況写真

(3) 繩文時代Ⅱ期～弥生時代Ⅰ期の間に推定される遺構

性格不明の土坑群

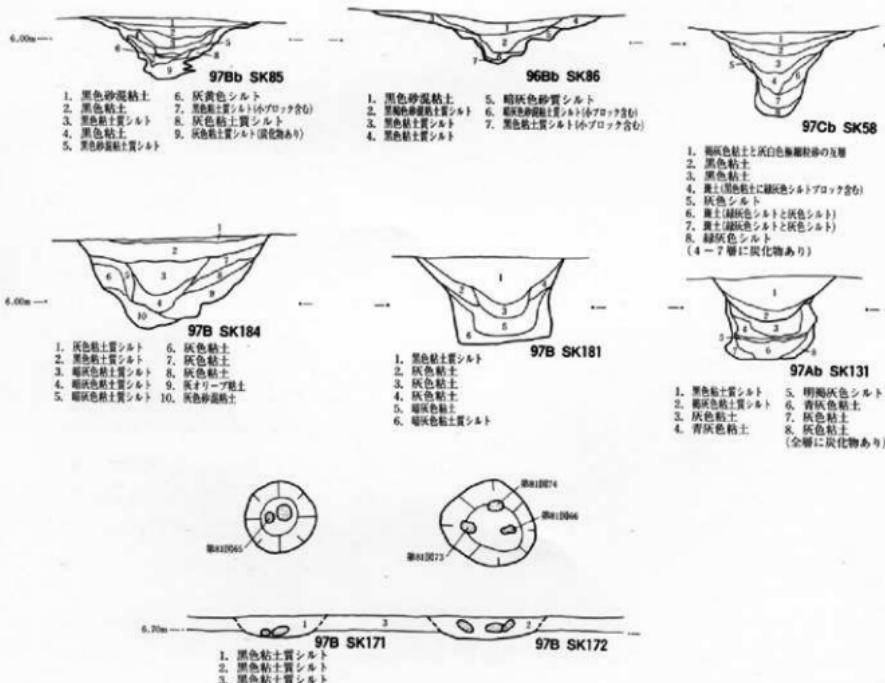
性格不明の土坑群

96Bb区・97Ab区・97B区の微高地縁辺で、性格不明の土坑群（96BbSK85・86、97AbSK131、97B SK181・184、97CbSK58など）が検出された。いずれも出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、層位より繩文時代Ⅱ期～弥生時代Ⅰ期の間に推定される。この土坑群は、それぞれ形態が異なるため、同一の性格のものとは考え難い。推測ではあるが、井戸、貯蔵穴あるいは陥穴か。

石器埋納土坑

石器埋納土坑

97B区の微高地上で、石器類（蔽石と用途不明品（磨石または台石））がセットで埋納された土坑2基（97B SK171・172）が検出された。遺構の時期は、層位より繩文時代Ⅱ期～弥生時代Ⅰ期の間に推定される。近辺から下呂石・チャートなどの剥片が多く出土していることから、石器製作の場に関連したものであろうか。あるいは、後述する弥生前期の墓域に関連したものであろうか。



第22図 石器埋納土坑平面図・断面図 (1:40)

2. 弥生時代Ⅰ期

弥生時代Ⅰ期 弥生時代Ⅰ期の遺構は、出土遺物より弥生時代前期（尾張編年に対比すると、Ⅰ-2期に相当する。出土遺物の詳細は、第3章第1節2を参照。）のものと考えられる。また、先述したように遺構の検出が極めて困難であったため、明瞭さを欠くものが多くなってしまった。遺構の性格は、居住域に関連するもの、水田域に関連するもの、墓域に関連するものの大きく3つの遺構群に分かれる。以下、それぞれの遺構群について報告する。

居住域

(1) 居住域

この時期の居住域は、谷地形西側の微高地上に展開し、その中心地は96Cb区とその東の96Ti付近と考えられる。主な出土遺物としては、遠賀川系壺型土器・甕型土器・条痕紋系壺型土器・甕型土器・水式系削痕深鉢型土器・各種石器類などがあげられる。

居住域の遺構

居住域の遺構

96CbSD17・23・24などは、明瞭さを欠くが堅穴住居の周溝と考えられる。96TiSB03、SX01も堅穴住居の可能性が考えられる。96CbSK50・153・157、96TiSK01などの土坑群はこの時期の遺構と考えられる。他の調査区と比較して、96Cb区・96Ti付近からの遺物出土量が多い。96Cb区より出土した遺物は、その分布状況をみると出土地点が集中しているものがあり、黒色土層中から立位で出土したものもあった。これらのことから推察すると、これらの遺物は検出できなかった遺構出土の可能性が考えられる。

土器製作の場

土器製作の場

96TiSK01から遠賀川系土器（壺・甕・鉢）、水式系削痕深鉢型土器が出土した。このうち、

焼成剝離土器

遠賀川系壺型土器は、焼成時の剝離痕と剝離した土器片が接合した。このことから、

片

96TiSK01付近で土器焼成が行なわれ、本遺跡に土器製作の場が存在していたことが想定される。96TiSK01に隣接する96TiSB03は、炭化物が広範囲に拡がる遺構であり、土器製作との関係が推察される。

石器製作の場

石器製作の場

96CbSK157は、下呂石の剥片98点が出土し、石器製作によって生じた剥片の廃棄土坑と

土坑

考えられる。剥片・石核の出土分布状況（第3章第3節1の第83図参照）をみると、96Cb区・96Tiを中心とした微高地上に集中し、石器製作の場が想定される。97B区の微高地上では、下呂石の他にチャート・サヌカイトと思われる剥片なども出土しているが、96Cb区の微高地上で出土した剥片は、ほとんどが下呂石である。97B区の微高地上で出土した剥片を縄文時代のものと推定すると、縄文時代と弥生時代前期に使用された石材の変化が比較できよう。

遺構の時期

遺構の時期

遺構出土遺物を尾張編年に対照してみると、96CbSK50、96TiSK01はⅠ-2期古段階、

96CbSK153、96TiSB03はⅠ-2期中段階、96TiSK01はⅠ-2期新段階に比定できる。

水田域

(2) 水田域

水田跡

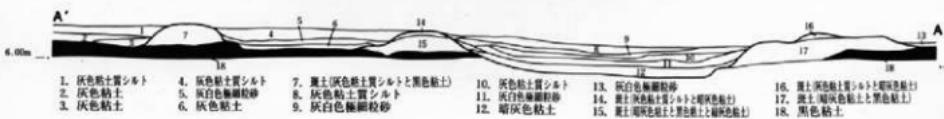
浅谷化した旧河道（NR01）の低湿地部で、南北方向に走り、両側に盛土を伴う幅3m・深さ40cm程の溝、97AbSD46（96A SD25、97B SD92と同溝）を検出した。地形の高低差が緩やかになる97Ab区では、97AbSD46両側盛土にそれぞれ直交する盛土と、西側の盛土から約5m西に平行する盛土を検出した。平行する盛土は、その両脇に、造成時に土を搔き上げた痕跡と思われる浅い溝状の窪地（97AbSD50・57）を伴っている。97AbSD46西側盛土と平行する盛土との間で東西方向に走る97AbSD56も土を搔き上げた痕跡と思われる。

97AbSD46東側に平行して走る97AbSD47は、97AbSD46より後の時期に掘削され、西側の盛土は97AbSD46東側盛土と共有している。この97AbSD47の東側盛土中及び、低湿地部の当該時期の土層中（97Ab区南壁）より、イネの植物珪酸体（プラント・オパール）が検出され、97B区・97Ab区の微高地縁辺から徳摘具と考えられる粗製剝片石器が4点出土している。これらのことから、97AbSD46両側盛土に直交・平行する盛土は大畦畔であり、盛土を伴う溝は水田に水を供給するための用水路であり、水田跡と考えられる。溝の両側盛土は、水位を水田面より高く設定するために土手状に高く築かれたものと推察される。小畦畔の有無は確認できなかったが、上位堆積の砂層より、その後の洪水により削平された可能性が考えられる。明確な排水路ではなく、自然の緩傾斜地形による田面高低差を利用した田越し灌漑によって、順次、水を配していくものと推定される。遺構の遺存状態が悪く、水田耕作土層も確認できなかったが、先述したイネの植物珪酸体を検出した層が、水田床土層下部と推定される。明確な水田域は不明であるが、97Ab区の低湿地部を中心とした97AbSD46の東西両側に展開していたものと想定される。

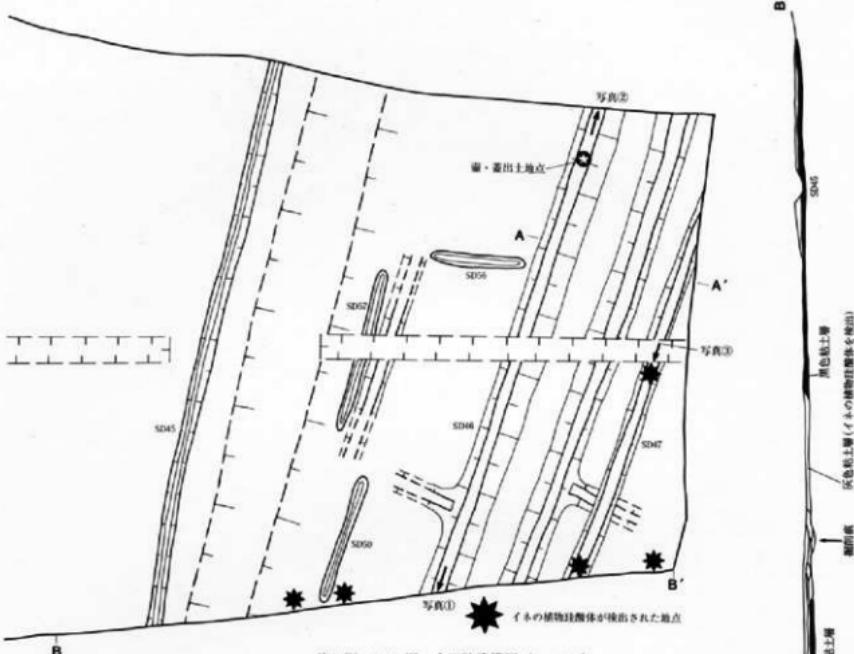
また、97AbSD45は、層位的に97AbSD46・47より新しく、後の時期に水田用水路として利用されたものと推察される。弥生時代Ⅱ期の層位より下位の遺構のため、弥生時代Ⅰ期の遺構に含めた。

盛 土

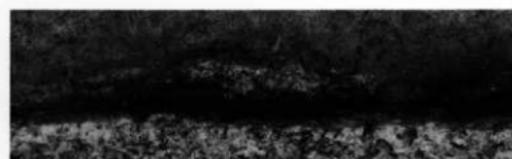
97AbSD46両側盛土は下端幅120cm、高さ20cm程で、97AbSD47東側盛土及び平行する盛土は高さ15cm程とやや低く、直交する盛土はさらに低く、高さ5cm程であった。盛土は、基盤層の黒色粘土層とその下層の灰白色粘土層が搔き上げられ造成されたものと推察され、両者がブロック状に混じり合った斑土を呈している。大きなブロックで構成された部分は、造成当初の盛土部分と推察され、細かいブロックのみで構成される所、黒灰色を呈する所、盛土直下層の黒色粘土層が搅拌されている所は、再造造成された盛土部分と推察される。盛土は分層可能な部分が多く、繰り返し修理され、利用されたものと思われる。



第23図 97AbSD46・47断面図 (1:40)

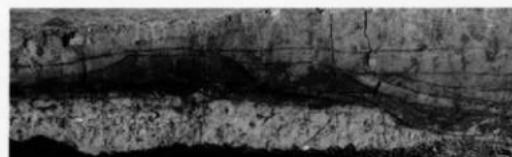


第24図 97Ab区 水田跡造構図 (1 : 200)



① SD46西側盛土

黒色粘土層下層の灰白色粘土層と思われる大プロックがみられ、造成当初の盛土部分と推察される。



② SD46西側盛土

幾度か、造成され直されていることがわかる盛土部分。



③ SD47東側盛土

SD46盛土より、後に造成された盛土部分。盛土の各層より、イネの植物遺体が検出された。

第26図 水田跡盛土断面写真

第25図 97Ab区 断面写真 (1 : 100)

水田跡の時期

水田跡の時期

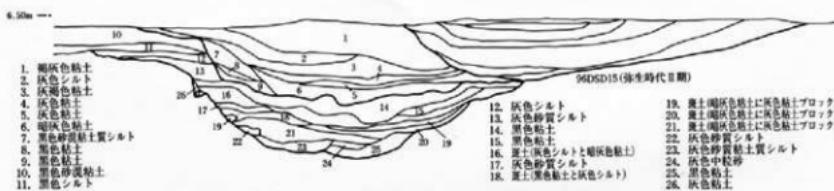
97AbSD46西側盛土中から遠賀川系の壺型土器と壺蓋型土器がセットで出土した。尾張編年に対照してみると、I - 2期中段階に比定できる。底部は残存せず、土器片は動いている。出土した盛土部分は、大きなブロックを含まず、細かいブロックで構成され、全体として黒灰色を呈しているため、再造作されたものと推察される。推測の域ではあるが、水田における祭祀目的で盛土内に埋設された可能性が考えられ、その後、盛土が再造作されたため、土器片が動いたものと推定される。時期決定可能な遺物は少なく、他に氷式系削痕深鉢型土器片が97Ab区の水田域から少量出土している。また、参考資料として掲載するが、¹⁴C年代測定結果によると、97AbSD46の埋土最下層はB.C.490年、同地点の基盤層（黒色粘土層）はB.C.960年の曆年代値を得た。

96D SK16

96D SK19は、その下層部の黒色粘土層などからイネの植物珪酸体が検出された。



第27図 97Ab SD46西側盛土内遺物出土状況図 (1:20)

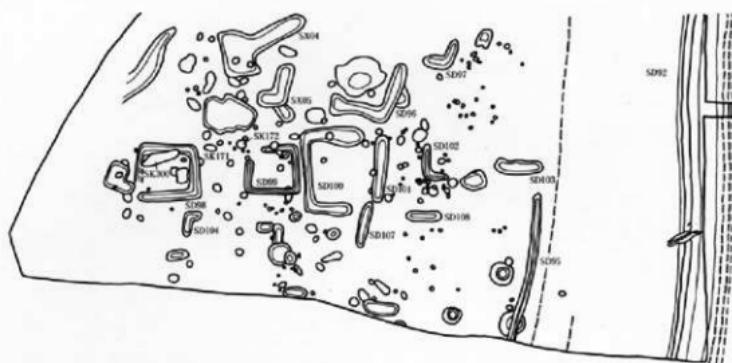


第28図 96D SK19断面図 (1:40)

墓域

(3) 墓域

97B区の微高地で方形周溝状を呈した遺構群を検出した。調査時は、竪穴住居の周溝を想定していたが、炭化物や柱穴らしい土坑がみられず、遺物も細片でほとんど出土しなかったため、諸氏に助言をいただき、再考した。遺構群が一定の方位を意識して造作されていること、96Cb区を中心とした微高地に居住域を想定すると、やや離れた場所に位置していることなどから、墳丘及び主体部は確認できなかったが、非A4形の方形周溝墓群と考えられる。遺構の時期は、層位より弥生時代前期以前と推定される。また、出土遺物は細片で、供獻土器と考えられるものは、確認できなかった。



第29図 97B区方形周溝墓群（1：400）



第30図 弥生時代Ⅰ期造構模式図（1：2000）

3. 弥生時代Ⅱ期

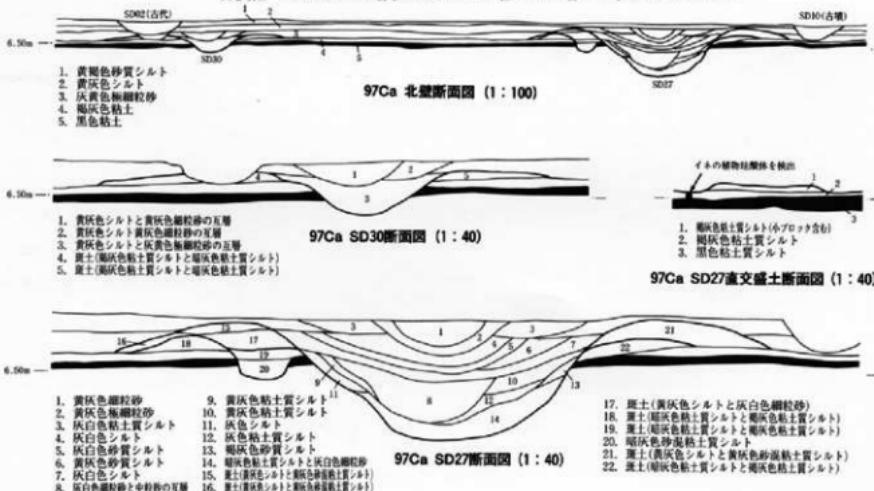
弥生時代前期から後期の間に考えられる時期に、再びNR01の活動が活発化したため、播作は、微高地西側の縁辺部の緩傾斜地で展開するようになったと推察される。幅3m・深さ1m程の大溝、97CaSD27(96BbSD17、96CaSD06、96CbSD16、96DSD15、97BSD93、97AaSD06、97CbSD16と同溝)は盛土を伴い、大溝から分岐・合流する溝群のうち、97CaSD29(97CbSD20と同溝)・30、97CbSD18(96BbSD20、96CaSD05と同溝)・19・21、96BbSD19には盛土がみられたが、97CaSD28、96BaSD38(96BcSD01と同溝)、96E SD06・07には盛土がみられず、他の溝の盛土の有無は不明である。また、97CaSD27西側盛土と97CaSD30東側盛土に直交する盛土が確認されたこと、97CbSD16の西側盛土などに水口がみられたこと、溝の埋土や同層位の土層中からイネの植物珪酸体が確認されたことなどから、これらの溝群は水田用排水路として利用され、水田域は大溝の西側に展開されたものと想定される。Ⅰ期と同様、小畦畔の有無は確認できなかった。溝や同層位の土層中からの出土遺物は、弥生前期の土器細片のみで、明確な時期は不明であるため、層位より時期幅を設定した。弥生時代後期までの間に、幾度もの洪水性の堆積によって谷地形は段階的に埋没していき、その度に溝群は再掘削されたものと推察される。従って、各溝の掘削に時期差がみられた。また、この時期の居住域については不明である。

溝の掘削段階 古段階 97CaSD27下層・28・29下層・30下層・31、97CbSD19下層、96A SD16、

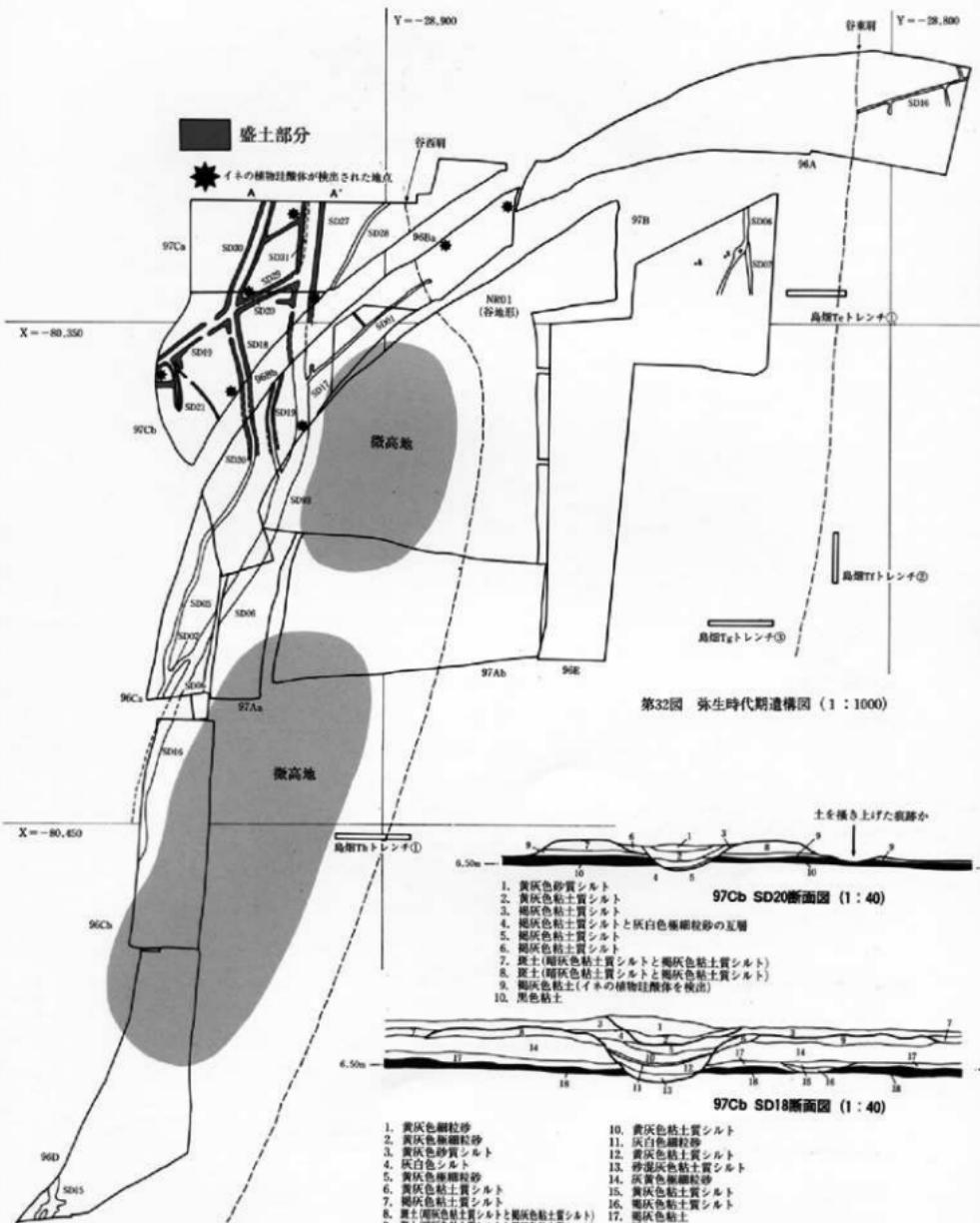
96BaSD36

中段階 97CaSD27中層・29上層・30上層、97CbSD18下層・19中層、96BbSD19、

新段階 97CaSD27上層、97CbSD18上層・19上層・21、96E SD06・07



第31図 弥生時代Ⅱ期遺構断面図(1)



第33回 萬生時代 II 期遺構断面図(2) (1:40)

4. 弥生時代後期～古墳時代

弥生時代後期までに、洪水性の堆積によって谷地形は埋没したが、溝の方向性などから前時期とはほぼ同位置に微高地が存在し、居住域が展開されていたものと想定される。

(1) 弥生時代後期（山中式後期）～古墳時代前期①（廻間I式）の遺構

97B SK74 楕円形の浅い土坑。山中式後期の遺物（有段高杯、小型の広口壺など）のみ出土。

96Ti SK02 井戸の可能性が考えられる土坑。廻間I式の有段高杯、浅鉢が出土。

97Ab SD33 97B SD20などと同溝。微高地東側の縁辺に沿い、南北に走る溝で、97B SD21・26と合流する。廻間I式の有段高杯、く字壺、「バレス・スタイル」壺が出土。

他に96D SK01、96TiSB01・02、97AbSD29が同時期の遺構と思われる。

(2) 古墳時代前期②（廻間II式）の遺構

97Ab SD30 97AbSD30直下に97AbSE01がある。97AbSE01近辺では、溝幅が広く、埋土に砂が多く混入している。97AbSE01は井戸と思われ、涌水施設が想定される。

他に97B SD38・47、97CaSD14など南北に走る溝が同時期の遺構と思われる。また、(2)の時期以降に、古墳時代前期包含層（褐灰色粘土質シルト層）が堆積している。

(3) 古墳時代前期③（松河戸I式）の遺構（埋土は、黒褐色粘土質シルト）

井戸の可能性が考えられる土坑。S字状口縁台付壺C・D類、無透孔屈折脚、柳ヶ坪型壺、小型丸底鉢（完形）、小型器台などが出土。

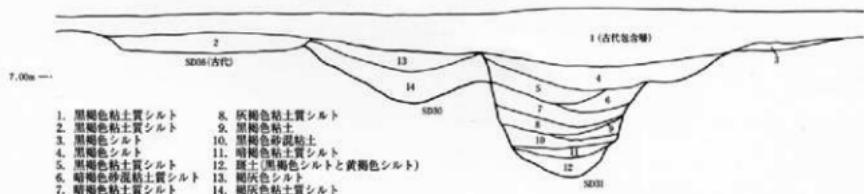
97B SD76 96BbSD08などと同溝で、微高地西側の縁辺に沿い、南北に走る溝。97Ab区で97AbSD31と97AbSD60（97AaSD01などと同溝）に分岐する。97AbSD31は、何度も掘削し直された溝で、遺物も多い。他の溝の出土遺物は少量で、細片。

他に96BaSK14、96TiSE01・02からも松河戸I式の遺物が出土している。

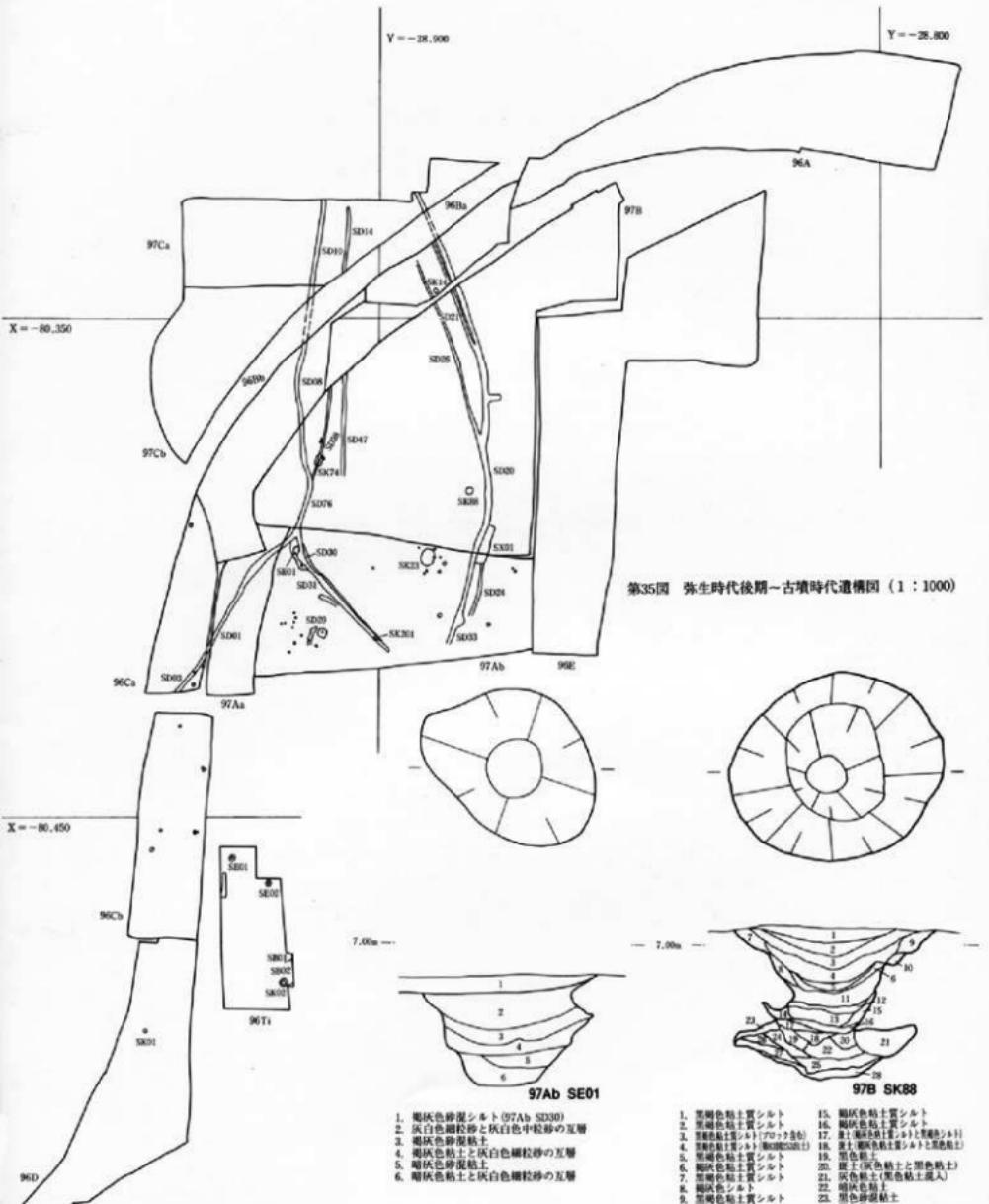
(4) 古墳時代後期の遺物を含む遺構

97Ab SK201 東山61号窓式須恵器杯が出土。この時期の他の遺構は未確認。遺物も極少量。

居住域 居住域は、97Ab区南側から96Cb区東側の微高地上に想定される。97B区を中心とした微高地上の遺構は希薄にみえるが、古代～中世の遺構や土層から、この時期の遺物が多く出土している。微高地上に古墳前期・古代包含層が残存しないことから、後世の開発により、大規模な削平を受けたことが推察されるので、ここにも居住の場が推測される。



第34図 古墳時代遺構断面図(3) (1:20)



第35図 弥生時代後期～古墳時代遺構図 (1 : 1000)

第36図 古墳時代遺構平面図・断面図(2) (1 : 40)

1. 塗灰色砂凝シート (97Ab SD30)
2. 黒褐色粘土質シルト
3. 塗灰色砂凝粘土
4. 塗灰色粘土と灰白色砂凝の互層
5. 塗灰色砂凝粘土
6. 塗灰色粘土と灰白色砂凝の互層
7. 塗灰色粘土質シルト
8. 塗灰色粘土質シルト
9. 塗灰色粘土質シルト
10. 塗灰色粘土質シルト
11. 塗灰色シルト
12. 塗灰色シルト
13. 塗灰色シルト
14. 塗灰色粘土質シルト
15. 塗灰色粘土質シルト
16. 塗灰色粘土質シルト
17. 塗灰色粘土質シルト (97Ab SD30)
18. 塗灰色粘土質シルト
19. 黑褐色粘土
20. 灰褐色粘土質シルト
21. 塗灰色粘土質シルト (97Ab SD30)
22. 黑褐色粘土
23. 黑褐色粘土
24. 黑褐色粘土
25. 黑褐色粘土
26. 黑褐色粘土
27. 塗灰色粘土
28. 灰褐色粘土質シルト

5. 古代

古代の遺構と出土遺物は、96A区・96Ba区・97B区北部・97Ca区・97Cb区北部に集中し、この周辺に居住域が展開されたものと想定される。今回の調査では、猿投窓の東山50号窓式一美濃窓の丸石2号窓式の遺物を確認し、古墳時代後期の遺物（猿投窓の東山61号窓式）以降、およそ100年程の隔りがみられた。主な出土遺物としては、須恵器の杯・杯蓋・碗・盤・鉢・灰釉陶器の碗・皿類・土師器の壺の他、横瓶のミニチュア、刻印のある須恵器、製塙土器、都城形の土師器を模倣した杯などがあげられる。遺構出土の遺物は、猿投窓の折戸10号窓式一黒篋90号窓式のものに集中し、古代包含層（黒褐色粘土質シルト層）からは黒篋90号窓式までの遺物が出土している。猿投窓の折戸53号窓式から美濃窓の丸石2号窓式の遺物は、中世以降の遺構や土壁より出土し、この時期の遺構は確認できなかった。

溝群

検出された溝群は、残存良好な所で幅1m・深さ60cm程を測り、概ね北東から南西方向に走るが、96Ba区・97Ca区などで、一部東西方向のものもみられた。同じ溝で方向が変化するものもあり、自然微地形の起伏の影響であろうか。97Abでは、97Ab SD28 (97B SD14などと同溝) からほぼ垂直方向に分岐する97Ab SD36を検出した。また、溝群は何度も掘削され直されたものが多い。折戸10号窓式までの遺物が出土した溝は、96A SD08、96Ba SD27・28、97B SD05・09・14、97Ca SD11・17、97Cb SD11などがあげられる。その他、96A SD10から黒篋7号窓式までの遺物、96A SD09から黒篋14号窓式までの遺物、96Ba SD17から黒篋90号窓式までの遺物が出土している。古代の溝群と古墳時代までの溝群を比較すると、その方向性に変化がみられる。古墳時代までは南北方向に走るものが多く、古代は概ね北東から南西方向に走るものが多い。自然微地形の変化以外に、上流河川流路の変化の可能性が推測される。それが自然環境変化か、人為的なものは不明である。

その他の遺構

96A SB01

96A区の溝群の南側で竪穴住居2棟 (96A SB01・02) を検出した。96A SB01は、北辺にカマドが造られたとみえ、焼土・炭化物が集積する。97B SK130は井戸の可能性がある土坑。97Cb SK12と97Cb SK14は、いずれも方形の土坑で97Cb SD11直下に位置する。97Cb SK14出土の須恵器片が97Cb SD11出土のものと接合し、溝と土坑の時期差はあまりないものと推察される。97Cb SK12・14は、共に深さ90cm程を測り、井戸のような性格をもつ遺構と思われる。直上の溝と関連するものと推定すれば、涌水施設の可能性が想定される。これらの遺構からは、いずれも折戸10号窓式までの遺物が出土している。

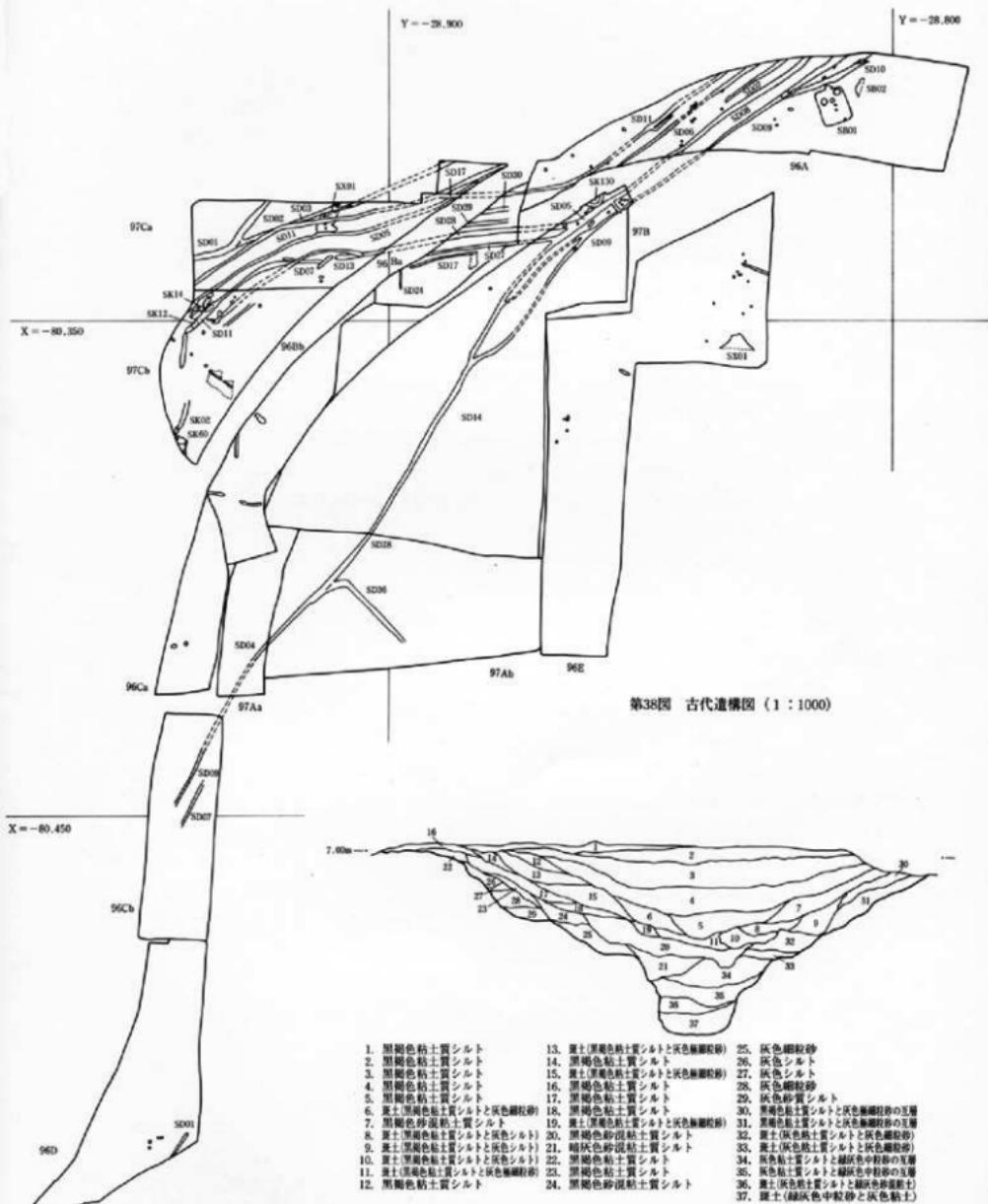
97B SK130

97Cb SK12

97Cb SK14



第37図 古代遺構断面図 (1:40)



第38図 古代遺構図 (1 : 1000)

第39図 97B SK130断面図 (1 : 40)

6. 中世以降

中世Ⅰ期

(1) 中世Ⅰ期（鳥畠景観形成以前）

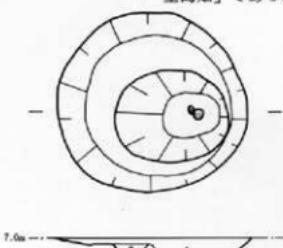
97Ab区で古代の溝群の軸線と同方向の竪状遺構と考えられる溝群を、97Ca区でも同方向の溝群を検出した。また、方形土壙群（97AaSK11・12・13、97AbSK01・02・03・04など）や97AbSX02内で自然石の集石（量的に多くないが、ほとんど重ならず、表面が焼けて赤く変色しているもののが多かった。）など墓域を想起させる遺構を検出した。96Ba区から97B区にかけて、隅丸長方形状に掘削された凹地内（97B SX11）で柱穴と思われる土坑と周回する溝群を、その東側と南側で区画溝群を検出した。これらは鳥畠に関連する遺構としては考え難く、墓域と関連した特殊空間の可能性が考えられ、97B SD12・13は中世塚墓の周溝ではないかと諸氏にご教示を賜った。97B SX11と区画溝群からは、尾張型第4型式～第6型式の灰釉系陶器碗などが出土している。96E SK13から外面高台に墨書がある尾張型第6型式の完形の灰釉系陶器碗が、97B SK68から尾張型第5型式のほぼ完形の灰釉系陶器碗が出土し、いずれも埋納された可能性が高い。97B SK128は井戸の可能性が考えられる土坑である。中世Ⅰ期の遺構は、後世の開発により、かなり削平されている。

中世Ⅱ期以降

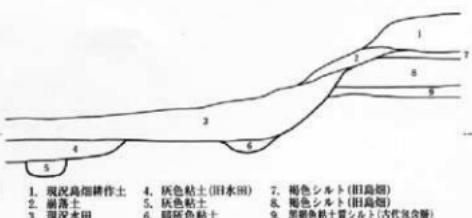
(2) 中世Ⅱ期以降（鳥畠景観形成以降）

概ね、東西・南北方向を維持し、正方位の条里地割に規制されたと思われる鳥畠・水田遺構及び、これらに伴う遺構群を検出した。鳥畠景観の形成時期について明確な時期決定は困難であるが、鳥畠に関連すると思われる遺構や旧鳥畠下層からの出土遺物より14世紀後半～15世紀頃と推定される。97CaSK01から東濃型盤之鳥窓式の完形の灰釉系陶器碗が出土した。伏せた状態で埋納され、豊作祈願の可能性が推察される。鳥畠景観は近世を経て現在まで続いているが、その間、鳥畠・水田遺構は幾度もの改変を受けている。

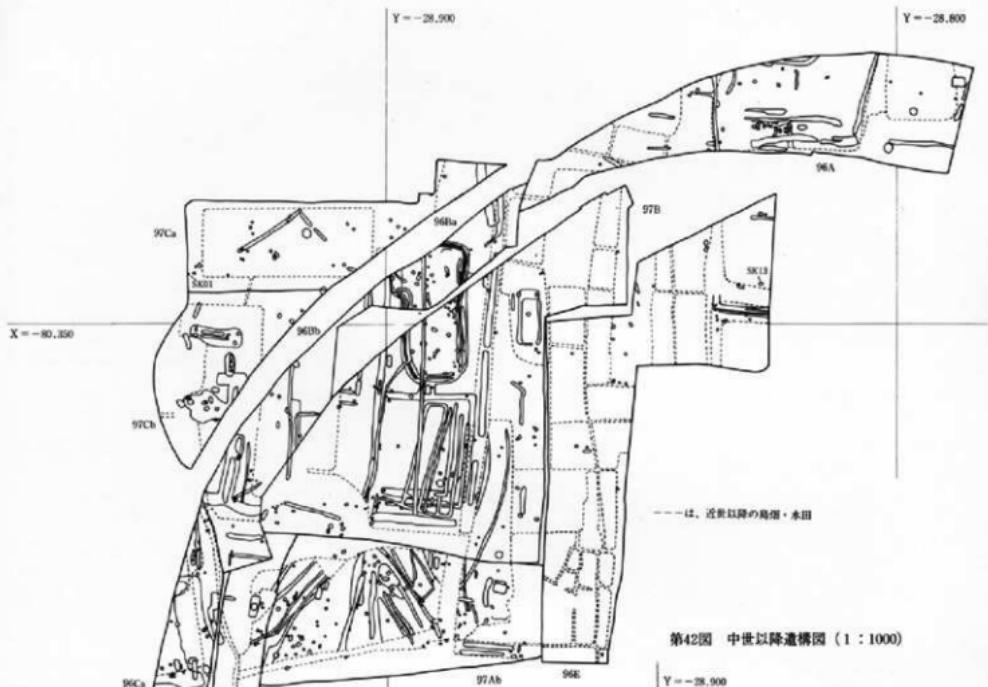
激しい河川流路の変化により形成された島状高地が点在するこの地域では、水がかりが悪いため、「地下げ」をして水田開発を行ない、その土を搔き上げて盛った部分を畠として利用した結果、鳥畠が生まれたものと推測される。鳥畠遺構の多くは「地下げ型鳥畠」であった。鳥畠遺構の造成過程と形成時期の詳細は付論で述べることにする。



第40図 97BSK128平面図・断面図 (1 : 40)



第41図 97Ab鳥畠10断面図 (1 : 40)



第42図 中世以降造構図 (1 : 1000)



第43図 中世I期造構図 (1 : 1000)

第3章 遺物

第1節 土器・陶磁器類

1. 繩文時代

遺物の時期

今回の調査で出土した土器は、後期前葉と晩期中葉のものにまとまりがあり、その他、後期中葉から晩期前葉のものがある。その殆どが砂混黒色粘土質シルト層・黒色粘土層などの黒色土層及びその直下からの出土で、その他、下位の遺構や上位の層からも出土した。黒色土層出土の土器は、埋土が近色・近質の遺構出土の可能性も考えられる。そこで、本報告では出土遺構や層位にこだわらず、従来の編年観に沿い、型式学的な操作に依拠した分類を加味し、記述することにする。なお、後期前葉の有文土器については、施文方法を中心にやや詳細に記述する。

時 期	土器型式(参考資料)		三ツ井の出土遺物
	近畿地方	東海地方	
後 期	初葉	中津式 福田K2式	未確認 未確認
	前葉	四ツ池・広瀬式 北白川上層式1期 北白川上層式2期	(林ノ峰C貝層) (林ノ峰B層2群)
	中葉	北白川上層式3期 一乗寺K式 元住吉山I式	八王子式 (林ノ峰B層3群)
	後葉	元住吉山II式 宮瀬式 滋賀里I式	寺津下層式
	前葉	滋賀里II式 滋賀里IIIa式	寺津式 元刈谷式 (當)
	中葉	滋賀里IIIb式	稻荷山式
晩 期	後葉	滋賀里IV式 滋賀里V式	西之山式 五貫森式 馬見塚式

『先史時代の北白川』及び『比叡山山麓の縄文』を参考に補足改変

第4表 三ツ井遺跡出土の縄文土器と関連編年対比表

後期前葉

(A) 後期前葉の縁帶文土器群で北白川上層式1期に対比できる資料

1は深鉢で、断面T字形の口縁部に渦巻文と重弧文が施され、それと継位の数条の沈線に区画された間に横位の両端が繋る沈線が施された後、縄文が加えられている。口縁部の重弧文の左側の横位の沈線部分の施文の切り合い関係を観察すると、縄文施文によって、沈線の縁が潰れてしまつたことがわかる。そのためか、再度沈線を引き直している。沈線施文後に、縄文施文され、再度沈線施文されることにより、沈線区画による横位平行の3本の縄文帯（中央の縄文帯は細長い島状を呈する）を構成している。外反する頭部は内外面ともに「磨き」調整され、無文である。胴部は、対向する継位の弧線で区画され、横位の3条の沈線が施された後、沈線間に縄文が充填されている。沈線の縁が潰れてしまつたためか、沈線そのものが不明瞭になつてしまつたためか、再度沈線が引き直され、沈線区画による横位平行の2本の縄文帯が作られている。また、充填された縄文が「磨き」調整済みの頭部と縄文帯下部には、はみ出していることが観察でき、「充填縄文」とよばれる施文手法であることがよくわかる。縄文帯の下部は「磨き」調整の後、横位の重弧文が施され、斜方向の多条沈線が施されている。今回の出土遺物の中で最古の資料と考えられる。3は1と同一個体の可能性が高い。2は深鉢の胴部で、「磨き」調整の後、多条沈線が施されている。

(B) 後期前葉の縁帶文土器群で北白川上層式1期～2期に対比できる資料

4は深鉢の口縁部であり、継位の数条の沈線が施された区画間に、横位の両端が繋る沈線とその中央に両末端に刺突を伴う沈線が施されている。沈線間に縄文が充填され、末端刺突の沈線を挟んで2本の縄文帯を作る。頭部は内外面ともに「磨き」調整され、無文である。5～9は縄文地に多条沈線が施されている資料であり、10～13は素文地に多条沈線が施されている資料である。5と6は同一個体の可能性がある。7は沈線で区画された部分の一部が磨消されている。12と13は同一個体の可能性がある。14は縄文施文後に、上・下部分を撫でているため、その部分の縄文が撫で消されている。15～19は縄文地に沈線が施されている資料であるが、縄文を充填し、再度沈線を引き直している可能性がある。17～19は、沈線を境に無文部分が見られ、沈線で区画された部分が縄文施文となる帶縄文手法の可能性がある。19は沈線を施した後、強めの「磨き」調整がされ、沈線の両肩の高さが違う。20・21は縄文施文が無文部分まで、はみ出していることから、縄文を充填し、再度沈線を引き直している可能性が高い。22～24は縄文施文により、沈線の縁が潰れているため、「磨き」調整後に沈線を施し、さらに縄文を加えた充填縄文が明確な資料である。23は補修孔とみられる穿孔がある。25・26は素文地に沈線が施されている資料である。27～32は若干丸く肥厚する口縁部外面に縄文帯をもつ深鉢の資料である。27は内外面ともに「削り」調整後に「撫で」調整してあり、口縁部外面に「撫り戻し」による無節の縄文（R）を施し、縄文帯を作る。縄文帯直下部は、再度「撫で」調整してある。縄文帯の幅を揃えるための調整かと思われる。28～32は内外面ともに「磨き」調整後に「撫で」調整してあり、口縁部外面に2段左撫の縄文を施し、縄文帯を作る。

縄文帯直下部は27と同様、再度「撫で」調整してある。32は補修孔とみられる穿孔がある。28-32の幾つかは同一個体の可能性も考えられるが、不明なため、口縁部資料のうち、5点を図示した。

(C) 後期前葉の縁帶文土器群で北白川上層式 2期に対比できる資料

33-41は断面し字形（内折「く」字形）の口縁部資料である。（B）に含まれる可能性も考えられるが、ここにまとめて図示した。33-38は充填縄文が明確な資料である。33は突起部分に渦巻文と重弧文が施され、その左側に逆「コ」字形の沈線区画とその内に方形の沈線文が施されている。34は左側の横位の沈線と繋ぐ縦位の沈線上に縄文施文され、右側の沈線は、沈線そのものが不明瞭になってしまったためか、再度沈線が引き直されている。35は横位平行の2条の沈線と沈線間に中心に刺突がある円文が施された後、縄文が加えられている。沈線の縁が潰れ、沈線・円文そのものも不明瞭であるが、沈線の引き直しは見られない。38は波状を呈している。39・40は縄文施文後、沈線が施されている資料であるが、再度沈線が引き直された可能性も考えられる。41は素文地に沈線が施されている。42-44は口縁部が屈曲しない平縁の資料である。42は横位平行の3条の沈線が施された後、沈線間に縄文が充填されている。43・44は沈線区画により無文部と縄文施文部に分かれている。また、口縁端部内面に段をもつ。45は波状縁の資料であり、「磨き」調整後に「撫で」調整され、無文である。46は口頭部が外反する深鉢で、内外面ともに「磨き」調整され、口縁端部内面に沈線が施され、一部、弧状に屈曲した沈線が続く。47は口縁が外反し、口縁端部内面に沈線が施されている。47は横位平行の2条の沈線間に縄文を充填して帯縄文を作る。沈線区画による帯縄文の上下に「磨き」調整された無文部分があり、北白川上層式2期の特徴を示す資料である。48・49は口縁部が丸く肥厚し、内外面ともに「磨き」調整された無文深鉢である。口縁部の肥厚の他、口頭部が外反し、頭部がくびれ、胴部が屈曲した形状で、近畿地方で北白川上層式2期に類例が多い資料のため、他の形式不明の無文土器と区別し、この分類に加えた。

後期中葉末

～後葉

(D) 後期中葉末～後葉の注口土器資料

50・51は後期中葉末～後葉に属すと考えられる注口土器である。50は屈曲する胴部に縦位の2条の沈線が施され、その沈線間に縄文が充填されて帯縄文が作られている。帯縄文は「たすきがけ状」に数ヶ所に施され、後期中葉の元住吉山I式に対比できる資料の可能性が考えられる。注口部はないが、その形状より注口土器と考えられる。51は注口部が短く、「しもぶくれ」の形状を呈し、後期後葉に属するものと考えられる。

後期後葉

(E) 後期後葉の凹線文系土器群の元住吉山II式から宮流式に対比できる資料

52は口縁部外面に口縁に平行した巻貝による3条の凹線文を施した後、凹線内を「撫で」により再調整している。そのため、太い凹線が密接し、輪郭も不明瞭となる。元住吉山II式から宮流式の古段階に対比できる。他にも少量出土しているが、小破片のため、

図示しなかった。53～57は口縁部外面などに口縁に平行した数条の凹線文（太い沈線）が施され、凹線が「磨き」や「撫で」により再調整されず、工具により引かれたままのものである。53と56は巻貝により3条の凹線が施されている。55は巻貝ではなく、半截竹管が用いられた可能性も考えられるが、ここに分類した。54は口縁部外面に2条の凹線と口縁部内面に1条の沈線が施されている。57は4条の凹線（沈線とよぶべきか）が施されている。

(F) 型式不明であるが、後期後葉に属すと考えられる資料

58は波状口縁の深鉢で、口縁部外面に繩文施文された後、波頂部の口縁部外面に瘤位に2個の瘤が貼り付けられ（下の瘤は頂部欠損）、波底部の口唇部分に瘤状突起が貼り付けられている。この瘤状突起の頂部には押圧が加えられている。外面は「磨き」調整され、内面は「撫で」調整されている。59はかなり緩やかな波状口縁の浅鉢で、口縁部内面に口縁に平行する1条の沈線が施された後、口縁端部と沈線との間の数ヶ所にボタン状の瘤が貼り付けられている。60は波状口縁の深鉢で、口縁部外面に繩文施文されている。瘤はないが、58に形状や施文手法などが類似した資料なのでこの分類に加えた。58～60は、他形式に類例がなく、時期も特定し難いが、出土層位と出土地点、他の資料との比較より、後期後葉に属するものと考えたい。

後期末

(G) 後期末の寺津下層式併行（四線文系土器群以外）の資料

61は肥厚した口縁部外面に文様帶として繩文が施された深鉢である。頸部は外反するが口縁部はほぼ直立する。

晩期初頭

(H) 晩期初頭の寺津式併行の資料

62～69は半截竹管による施文をもつ資料である。62は半截竹管状施文具を用いて横方向に施文している。63は口縁部外面に繩文を施した後、半截竹管文が施されている。64～69は摩耗のため、地文としての繩文が確認できない。64～67は同一個体の可能性がある。68・69は半截竹管による波状文が施されている。70はヘラ状具で、波状口縁の波頂部外面に山形（逆V字形・ハの字形）の数条の沈線と波底部外面に区画する継位の2条の沈線が施された後に横位の3条1単位の弧線文が施され、さらに繩文施文が加えられている。対向弧線文を構成している可能性がある。

晩期前葉

(I) 晩期前葉に属すと考えられる資料

71は口縁部外面に口縁に平行して2条以上の連続刺突文が施され、72は押引文が施されている。71・72は晩期前葉に属し、元刈谷式併行と考えられる。73は口縁部外面に三叉状の刻目隆帯が貼り付けられている。吉胡貝塚の晩期旧A（大洞B C式近似）の土器に近似したものであり、中部高地で類例がよくみられる。

晩期中葉

(J) 晩期中葉の稻荷山式併行の資料

74-78は無文深鉢である。74は「撫で」調整され、器面に粘土の輪積痕が明瞭に認められる。75・76は「削り」調整され、76は口縁部内面に種子痕がある。77・78は底部資料である。今回の調査で出土した縄文土器片の中で、図示しなかった資料を含めると、この時期に比定される破片数が最も多かった。後述する形式不明の無文土器群(M)の多くも、この時期のものと推定される。

(K) 型式不明であるが、晩期中葉に属すると考えられる

資料79は口唇部に連続押圧が加えられ、小さな波文を描いている。内外面ともに「磨き」調整された後、「撫で」調整されている。口唇部に粘土が付け加えられ、ヘラ状具あるいは棒状具で口唇部を波状にえぐるような強く深い押圧が加えられている。強い押圧により粘土が外側にはみ出したためか、その部分を内外面ともに「削り」調整した後、「撫で」調整している。口唇部の山部分は指、または布のようなもので押えて整形され、「撫で」調整されている。口縁部内面は小波状帯の下部がヘラ状具のようなもので整形された後、丁寧に「撫で」調整され、浅い波状の凹線となっている。神郷下遺跡に圧痕波文の口唇を持つ土器例があるが、本遺跡の土器の方が、調整が丁寧なように思われる。80は口縁部内面に工具により広く浅い凹線が施してある深鉢である。内外面ともに「磨き」調整された後、「撫で」調整されている。口頸部の外反の形状が79と類似する。81は80と類似し、口縁部内面に広く浅い凹線が施してある。82は口縁部内面に沈線が施しており、玉縁状の口縁をなすものである。内外面ともに「撫で」調整されている。馬見塚遺跡日地点のBトレンチ包含層出土土器に類例がある。

馬見塚遺跡の報告では、「稻荷山式ないし西之山式土器に比定される」としている。

今回の調査では西之山式土器に比定されるものは出土していないため、稻荷山式に比定される資料の可能性が考えられる。82-84は特定の形式名は不明ではあるが、口縁部付近の施文方法などから晩期中葉に属するものと考えたい。

時期不明の

有文土器

(L) 型式が不明であり、時期特定し難い有文土器資料

83-85は隆帯が貼り付けられて二枚貝の腹縁による刻目が施され、斜方向の数条で1単位の沈線が施されている。86・87は同種の沈線部分であろうか。83-87は同一個体の可能性が高い。88は口縁に平行する2条の沈線が施され、その上部は横位の羽状文が施され、下部は斜方向の2条1単位の沈線が施されている。83-88は同形式と考えられる。他に類例を知らず、時期は特定し難いが、晩期終末、あるいは縄文時代以外の可能性も考えなければならないかもしれないかもしれない。

無文土器

(M) 形式が不明であり、時期特定し難い無文土器資料

89は外面が「磨き」調整された無文精製壺であり、「く」の字状に屈曲した頭部に「ハ」の字状に内傾した頭部がつき、口縁部は緩やかな小波状(摩耗した突起の可能性も考え

られる）を呈している。大洞系の影響をうけた在地の土器であろう。76など晩期中葉の稻荷山式併行の土器群と同じ造形から出土しているので、89も近い時期のものと推定される。90は「く」字形口縁で、内外面ともに荒い「削り」調整の深めの粗製浅鉢である。90も晩期中葉に属すと考えられる。91～97は外面が「磨き」調整された資料、98～100は「撫で」調整された資料、101～103は「削り」調整された資料である。101は外面は「削り」調整されているが、内面は「磨き」調整後に「撫で」調整された資料である。口唇部に面を持ち、補修孔とみられる穿孔がある。104は屈曲して口縁部が外傾する。内外面ともに「磨き」調整後に、「撫で」調整している。形状と調整などを他の資料と比較して、91は後期前葉、92は晩期前葉、102～104は晩期中葉に属するものと考えられる。

底部資料

(N) 底部資料のうち、網代痕が明瞭に認められる資料として、105～107を図示した。

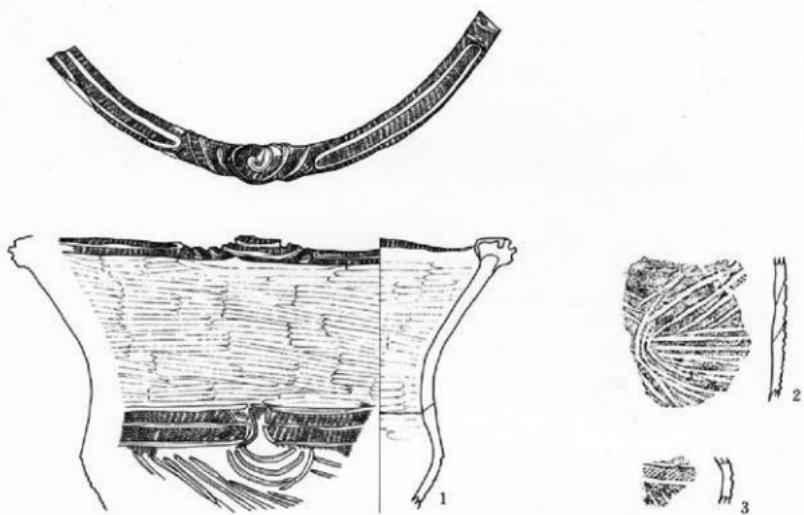
小 結

今回の調査で確認された縄文時代の遺物は後期前葉～晩期中葉にかけてのものであり、尾張低地部の出土例としては珍しく、資料的価値はかなり高い。また、従来の型式に適合しないものも出土し、今後の研究課題となろう。出土地点を概観してみると、後期前葉のものは97B区の微高地及びその周辺に集中している。後期中葉末～晩期前葉の遺物は97B区と97Ab区を中心に出土している。この時期の遺物量は少なく、周辺からの流れ込みの可能性も考えられるが、本遺跡周辺に入々が居住していたことは明確となった。晩期中葉の遺物は97B区と96Cb区の微高地及びその周辺に多くみられた。また、晩期後葉の時期に属する突帯文系土器は確認できなかった。本遺跡周辺に位置する中期の佐野遺跡、後期初頭の遺物が出土した椎現山遺跡、晩期の馬見塚遺跡などの関連性も考慮する必要があろう。

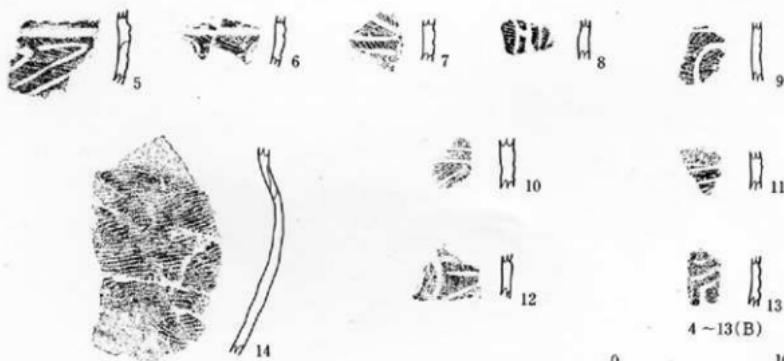
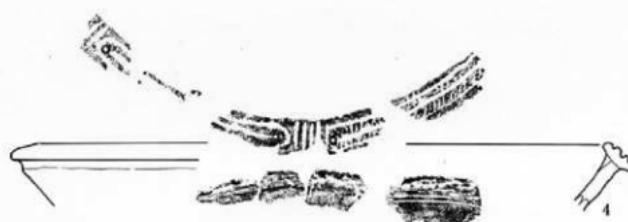
参考文献

- 千葉 豊 1989 「縄文帝系土器群の成立と展開」『史林』第72巻第6号
千葉 豊 1998 「後期縄文土器の施文手法ノート」『古代吉備』第20集
岩瀬彰利 1996 「縄文時代後期～晩期の煮炊具『鍋と甌そのデザイン』 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
相賀徹大編 1989 「縄文土器大図」4 後期 晩期 縄織文
紅村 弘編 1978 「東海先史文化の初段階」資料編Ⅱ
増子康真 1981 「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の初段階』本文編・補足改定版
一宮市 1970 「一宮市史」資料編1 縄文時代
設楽博巳編 1995 「東日本における農耕文化成立の研究 一愛知県一宮市馬見塚遺跡Ⅱ地点の発掘調査一」
刈谷市教育委員会 1993 「本刈谷遺跡」
文化財保護委員会 1952 「吉胡貝塚」
田畠 他・吉村勝志 1975 「神郷下道路」『豊田市埋蔵文化財調査報告書第二集縄文Ⅰ』豊田市教育委員会
森川幸雄編 1995 「天白遺跡」『三重県埋蔵文化財センター』
南知多町教育委員会 1985 「林ノ峰貝塚」I 南知多町文化財調査報告書第5集
余合昭彦編 1993 「三斗目・三本松遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集』

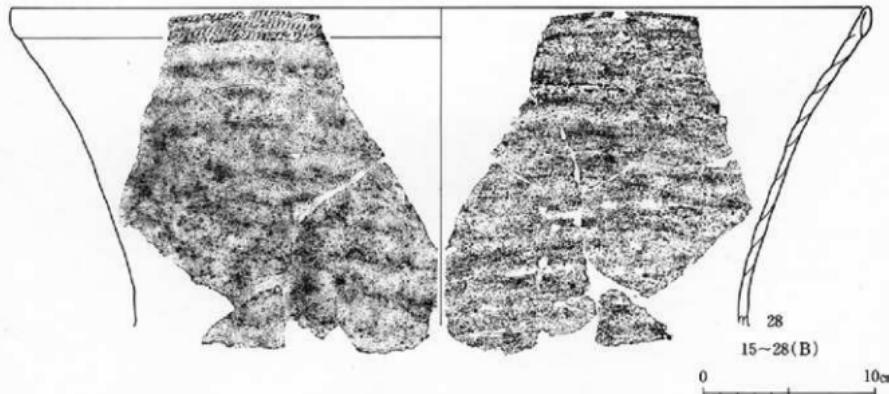
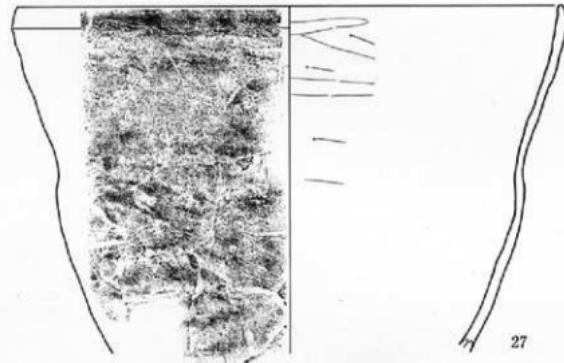
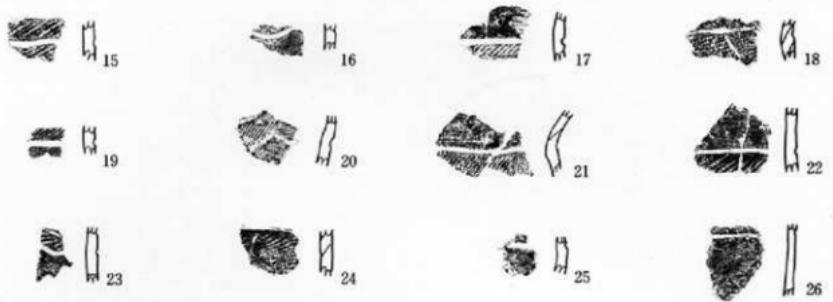
土器型式・施文・調整については、京都大学埋蔵文化財研究センターの千葉 豊氏、愛知県教育委員会文化財課の野口哲也氏にご教示を得た。



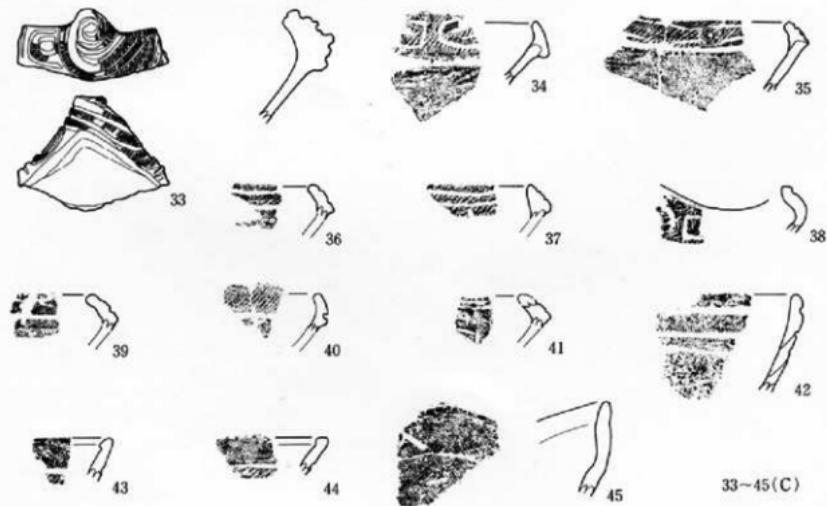
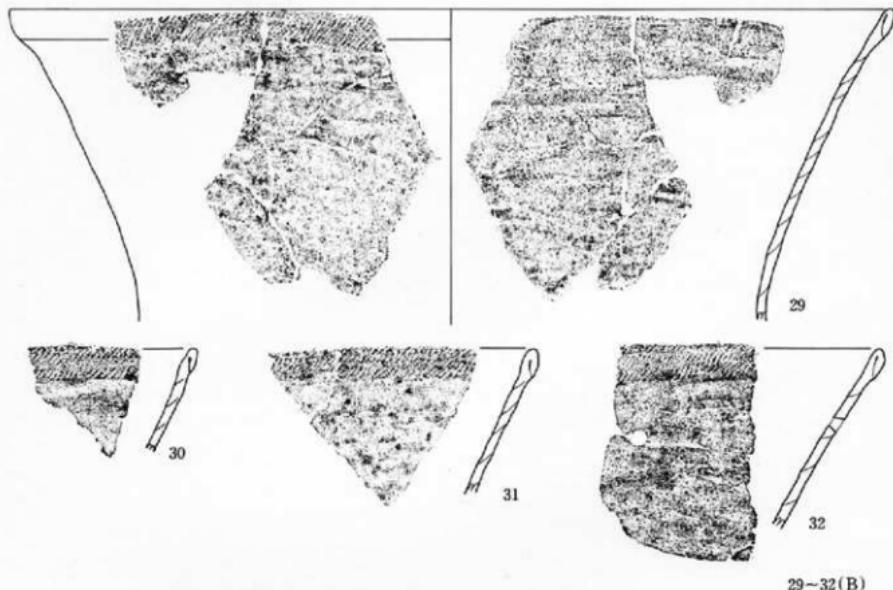
1 - 3 (A)



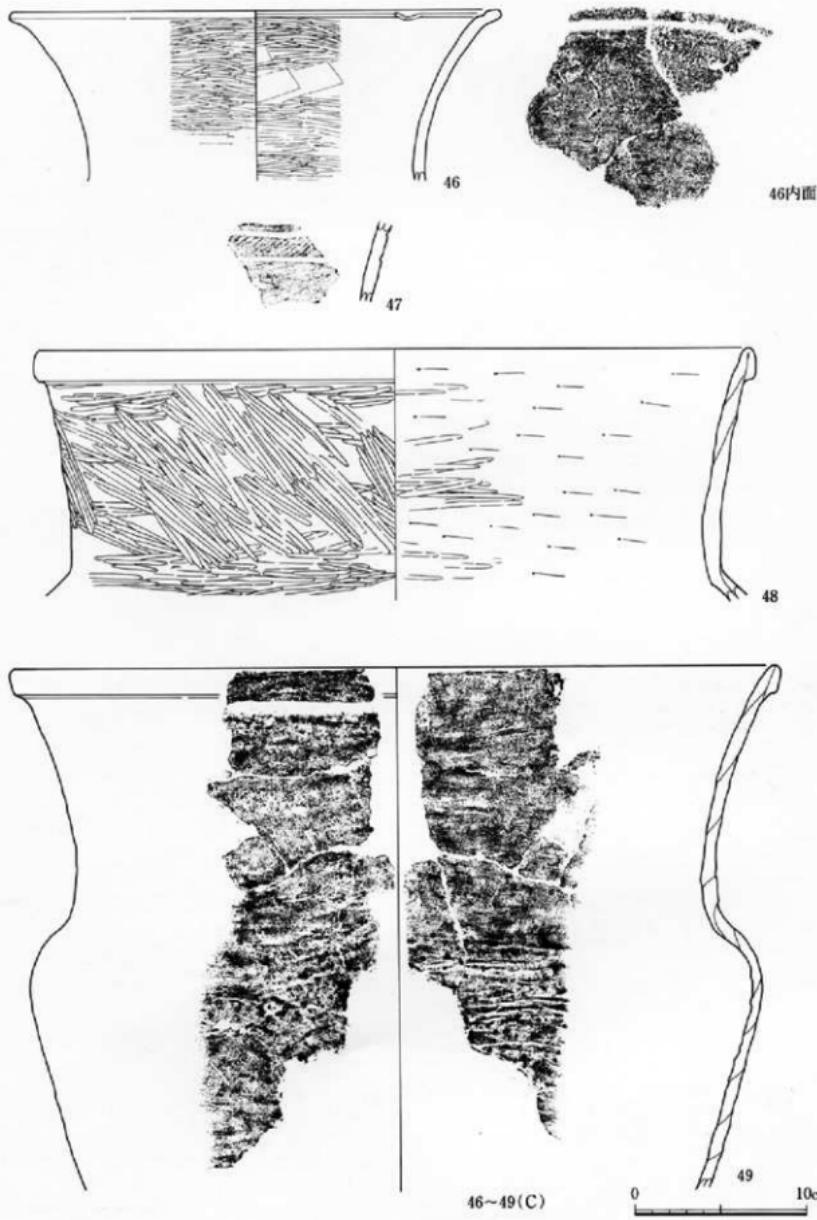
第44図 縄文時代の遺物実測図1 (1 : 3)



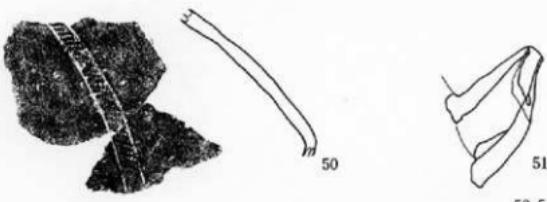
第45図 桶文時代の遺物実測図2) (1 : 3)



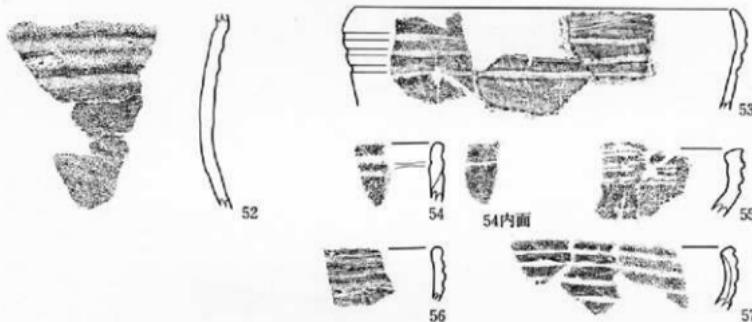
第46図 楢文時代の遺物実測図(3) (1 : 3)



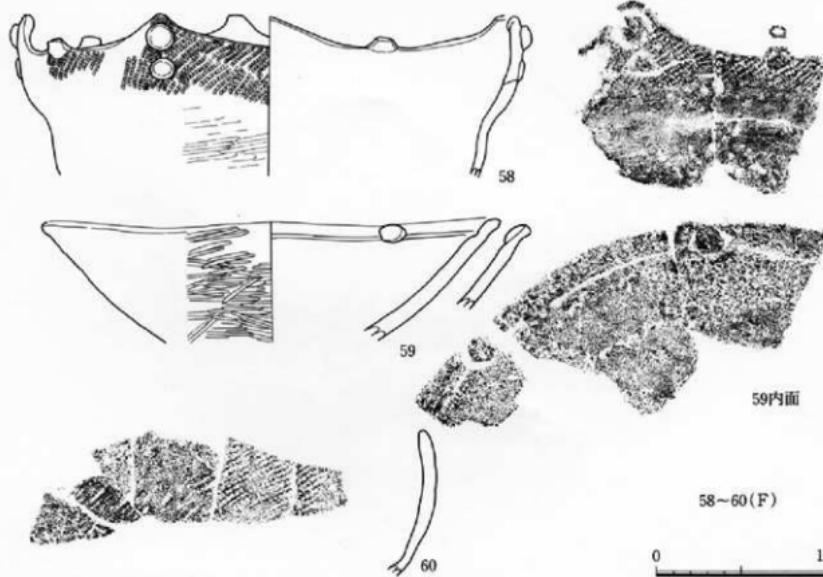
第47図 縄文時代の遺物実測図(4) (1 : 3)



50-51(D)



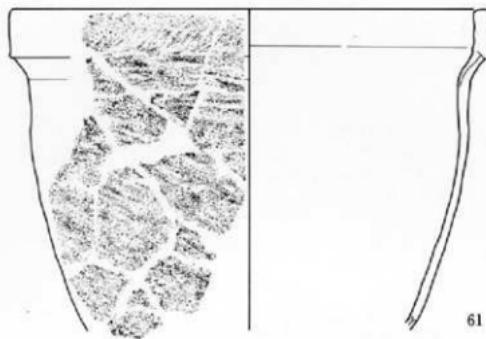
52-57(E)



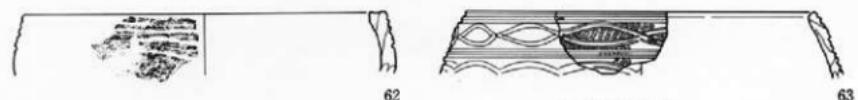
58-60(F)

0 10cm

第48図 純文時代の遺物実測図(5) (1 : 3)



61(G)



62

63



64



65



66



67



68



69



62~70(H)



71



72

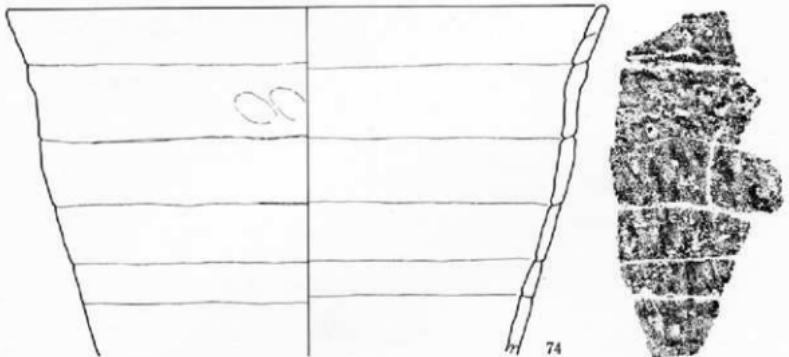


73

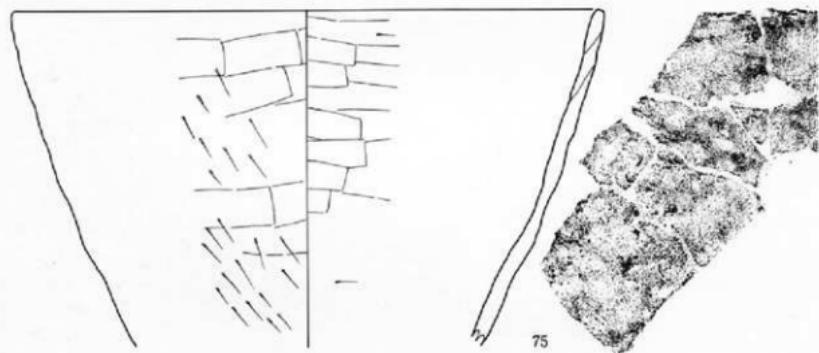
71~73(I)

0 10cm

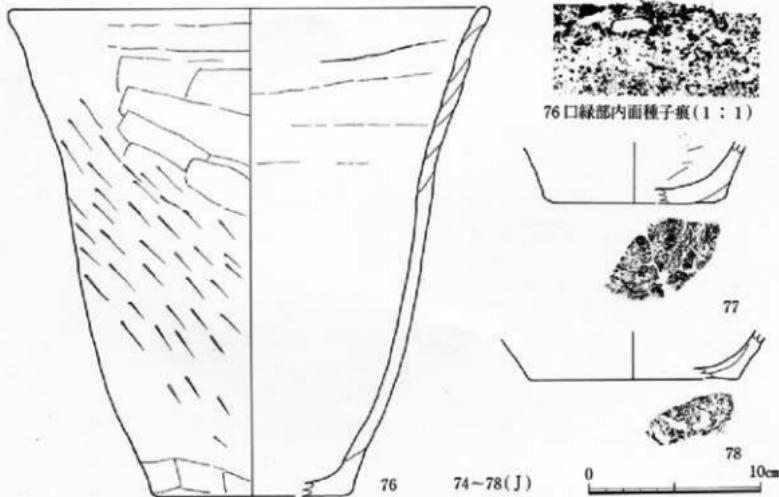
第49図 純文時代の遺物実測図(6) (1 : 3)



74



75

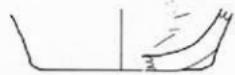


76

74~78 (J)



76 口縁部内面種子痕 (1 : 1)



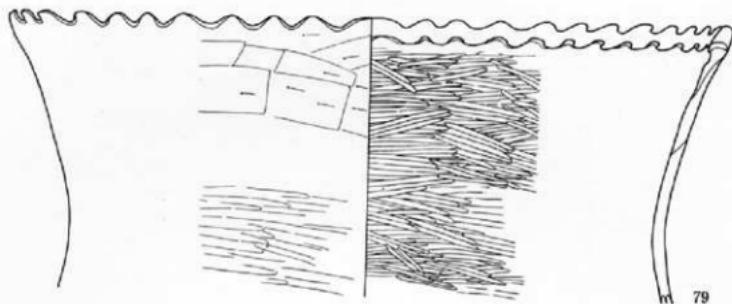
77



78

0 10cm

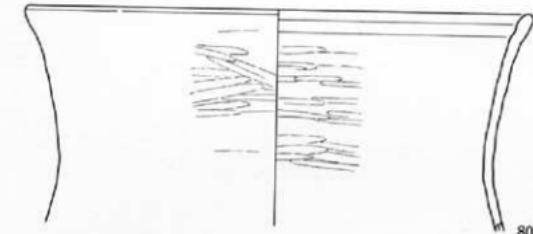
第50図 桶文時代の遺物実測図(7)



79

79口縁部内面

80口縁部内面



80

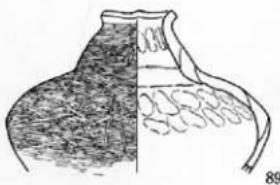
79~81(K)
81内面



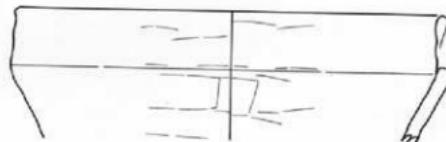
82

81内面

83~88(L)



89

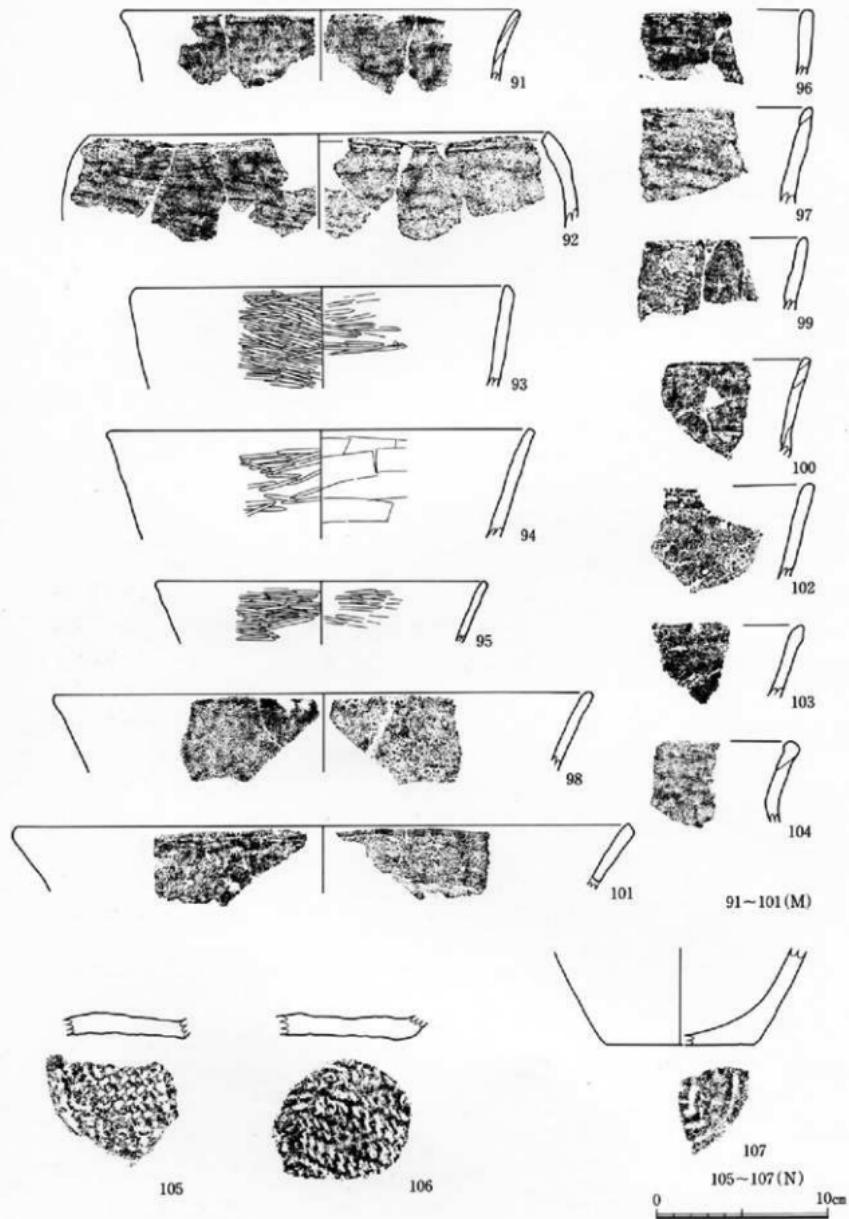


90

89~90(M)

0 10cm

第51図 純文時代の遺物実測図8) (1 : 3)



第52図 純文時代遺物実測図9) (1 : 3)

2. 弥生時代前期

1. 資料の概要

三ツ井遺跡の資料群は、名古屋市北区月繩手遺跡資料と比較すると、その前段階から古相にほぼおさまる。尾張編年（石黒・宮脅1997）に対比すると、I-2期に相当する。朝日遺跡貝殻山地点の抽出資料を除けば、現状で尾張平野部最古相に位置づけられる。

また、紅村弘の言う「元屋敷式」に類似する資料群ともいえる。その理由は、煮炊形態のほとんどが「削痕系深鉢形土器」という特徴を示すからだ。

さて、深鉢・壺形土器のなかに、從来の資料にあまり確認できなかった資料群がまとまって出土している。口縁端部に横長の連続押圧を施し、頸部がややくびれ、頸胴部の境目が明確な深鉢形土器である。胴部から底部にかけて板状工具などで、粗いケズリ調整を行う特徴をもつこの深鉢形土器は、水式系深鉢形土器と「削痕系土器」との中間形態、すなわち折衷土器ともいえる。今回の三ツ井遺跡資料群により、削痕系土器を単に突帯紋系ケズリ深鉢形土器からの一元的な系譜を見直す必要性ができた。仮に「水式系削痕深鉢形土器」とし、提示する。詳しくは付論で述べたい。

次に注目できる資料として、条痕紋系壺形土器がある。尾張平野部には突帯紋系土器期後半に近畿地方から影響を受けた「長原系壺形土器」が散見する。いまだ資料数が安定していないため詳細な検討にはいたっていない。しかし、三ツ井遺跡の条痕紋系壺形土器は大口町西浦遺跡・知立市中長遺跡より古相を持つ資料として注目できる。すなわち、頸胴部の境目を意識した調整をもち、口縁部に押圧突帯紋がめぐる壺形土器である。三ツ井遺跡では最古相を示す土器でもある。

以上、資料群のなかで注目できる事項を2つあげた。三ツ井遺跡の資料群は、從来の弥生前期資料に新たな視点を与えるものとなった。

2. 資料の分類

以下、資料を提示する前提として、分類を示す。まず、三ツ井遺跡出土資料を系統別に示す。次に系統内の壺形土器・壺形土器など形態分類を示し、器形・調整・紋様を中心して諸要素の概要を示す。以上、2点に基づき資料を提示する。

(1) 系統分類

遠賀川系土器

遠賀川系土器とは、汎西日本に拡がる弥生時代前期の土器群を指し、「遠賀川系土器様式」として中期初頭までその系譜は残存する。伊勢湾周辺では「条痕紋系土器様式」の成立を促し、中期の「畿内備指紋系土器様式」の成立に関与する。

伊勢湾周辺の遠賀川系土器はさらに4つの系統に区分できる。「中部瀬戸内系」、「畿内系」、そして伊勢湾西岸域で突帯紋系土器と折衷して成立する「伊勢南部系（紅村の言う「亞流遠賀式土器・金剛坂式」が相当する）」がある。ただし、今回は細分系統を示さず、

尾張I-2期

削痕系深鉢

水式系削痕深
鉢形土器

条痕紋系壺

長原系壺

系統分類

形態分類

遠賀川系土器として一括りにした。また、もうひとつ尾張平野部を中心として見られる「削痕系土器（紅村の言う「元屋敷式」の壺形土器）は組成上は遠賀川系土器様式として捉えてよい。しかし、系統区分上は「浮線紋系土器様式」の「水式系深鉢形土器」から成立する土器として今回取り扱うため、遠賀川系土器から外す。

条痕紋系土器

伊勢湾北・東岸域の突帯紋系土器が遠賀川系土器、あるいは近畿地方の突帯紋系土器、とりわけ「長原式」との接触から成立する土器群。成立当初から北岸域と東岸域の地域相がみられるものの器面全面に遠賀川系土器とは相反する器面調整を施す土器群である。すなわち、遠賀川系土器がミガキ・ハケ調整を最終調整に用いて器面をととのえるのに対して、条痕紋系土器は二枚貝腹縁に代表される工具を用いた荒々しい最終調整を施す。

内傾口縁土器は中村友博によって提唱された土器で、全形がいまだ不明の土器。口縁部の特徴から中期前葉に相当する岩滑式の厚口鉢形土器に型式変化するとされている。三ツ井遺跡では、ナデ調整のものが3点出土している。内傾口縁土器は条痕をもつものとナデのみのものがあり、しかも出自がいまだ不明なため、ここではとりあえず条痕紋系土器の組成の一部として扱う。

水式系土器

中部高地で繩文晩期後半の突帯紋系土器様式に影響を受けて成立する「浮線紋系土器様式」の土器群。伊勢湾周辺以西では、浅鉢形土器が繩文晩期後半から弥生前期の遺跡で散見する程度であるが、東日本と西日本を繋ぐ重要な位置づけを有する側面を持つ。ただし、伊勢湾北岸域、とりわけ尾張平野部には水式系土器の系統を引く粗製深鉢形土器が存在する。

(2) 形態分類

上記した系統別に壺形土器・壺形土器など形態的側面から分類し、各形態の特徴と調整、紋様などの概要を示す。

遠賀川系土器

壺形土器のほとんどを占める。形態的特徴について、口縁部が大きく外反するものではなく、概して直立する頸部から短く折れる口縁部をもつ。胴部も大きく張り出すものではなく、球胴に近い算盤状となる。外面調整は、ハケ調整の後、ミガキ調整を行う。底部付近は縦方向、口縁部から胴部にかけて横方向を基本とする。口縁内面は横方向のミガキ調整を行なうが、胴部から底部は概して難な調整である。紋様はヘラ描沈線によって構成される。概ね2~3条の横位沈線紋帶を基本とする。この沈線紋帶が上下のヘラ描沈線によって強調される「削出突帯」は壺形土器の特徴となる。また、胴部の横位沈線紋帶下に重弧紋をもつものもある。頸部あるいは胴部に紋様帯をもつ、遠賀川系土器通有の紋様構成となる。

壺形土器は煮炊形態のなかで劣性である。短く外反する口縁部をもち、胴部は底部に向かって緩やかに収束する形態。底部資料の中に脚状を呈するいわゆる上底となるものもみ

られる。調整は摩滅しているものの、ハケあるいはナデ調整と思われる。紋様は口縁端部に刻目を入れ、胴部上位にヘラ描沈線紋を施す。

鉢形土器は大型のものが目立つ。口縁部の形状や紋様帶は壺形土器と近似する。口縁部資料がほとんどで、全形は不明であるものの、内外面に概ねミガキ調整がみられ、壺形土器との調整による識別が比較的容易である。

条痕紋系土器

壺形土器と深鉢形土器が各1点と内傾口縁土器がある。壺形土器は長原系壺形土器に系譜をもつ突帯紋系土器の特徴を残す。一方、深鉢形土器は口縁部が外反しない、壺化指向を取り入れる以前の形態をもつ。両者ともに貝殻条痕の外面調整を全面に行う。

- 内傾口縁土器 内傾口縁土器は、いずれも口縁部資料である。口縁端部を内傾させ、強く横ナデを行う。その際、最上段の粘土紐が内面で巻き込むような形状として顕著に痕跡が認められる。したがって、口縁部資料は比較的容易に抽出できる。比較的全形が把握できる資料は名古屋市高蔵遺跡から出土している。

水式系土器

煮炊形態のほとんどを占める。今回提示する資料は水式そのものではなく、在來の突帯紋系深鉢形土器を基盤に水式系深鉢形土器、さらに遠賀川系壺形土器の3系統が融合し成立した削痕系深鉢形土器である。本報告では仮に「水式系削痕深鉢形土器（以下、水式系削痕深鉢）」と呼ぶ。形態は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、頸部がややくびれるものもある。調整は、頸胴部の境目を意識したもの、すなわち、頸部に横ナデ、胴部に縦方向のケズリ調整を行うものと、頸胴部の境目を意識しない口縁部直下まで縦方向のケズリ調整を行うものがある。様相としては、前者が古く、後者が新しい。口縁部は端部

- 水式系削痕深鉢 連続指頭押圧 あるいは外面に横方向の連続指頭押圧を施すもの、端部に強い横ナデを行い面取りをするものがある。様相としては前者が古く、後者が新しい。また、横方向の指頭押圧はさらに2者に細別できる。押圧のピッチが長いもの、短いものの2者がある。水式系の深鉢形土器に見られる口外帯を意識していると捉えるならば、前者がより水式系深鉢形土器に接近する特徴を有すると言えよう。

3. 資料の提示

掲載資料の総数は86点。実測可能なものはほとんど掲載した。造構出土資料が第1~4図、その他検出資料を第57図にまとめた。ただし、第55図の150~155は同一グリット内に集中する土器群で、一つの造構として取り扱った。この理由のひとつに、造構検出が困難であったことがあげられる。詳しい造構の検出状況は第2章を参照してもらいたい。

さて、造構出土資料に関しては概ね古相から新相を配慮して掲載した。

- 第53図上段 108~112は96TISX01資料。
108は条痕紋系壺形土器。口縁部はやや外反気味であるものの、頸部からほぼ直立して口縁部にいたる形態となる。頸部から胴部にかけて緩やかに開く。推定器高は約35cm口縁部には縦方向の押圧突帯がめぐる。押圧は指頭による下から上へ押し上げている。外面

調整は板ナデが頸部付近に若干見受けられる箇所があることから、まず、板状工具で一次調整を行い、後に二枚貝復縫による条痕調整を行うようである。条痕は頸部と胴部の境目に若干段を持つ。頸部は縦方向、胴部は横方向を基本に調整を行う。109は遠賀川系壺形土器。頸部が直立し、口縁部が短く外反する。外面調整は横方向のミガキを行う。110は内傾口縁土器。内外面ともにナデ調整。111～113は氷式系削痕深鉢形土器。111は口縁部が肥厚し短く外反する形態。口縁端部に幅約2cmの横方向の指頭押圧を連続して施す。口縁内面に面取りがみられる。外面調整は縦方向の板ケズリ。112は頸部がややくびれ、口縁部が外反する形態。口縁外面に幅約4cmの指頭押圧を連続して施す。頸胴部の境目が調整の違いによりわざかに確認できる。すなわち、頸部は横ナデ、胴部は縦方向の板ケズリがみられる。113は底部に木葉痕がみられる。

第53回中段

115～116は96CbSK50資料。

いずれも遠賀川系壺形土器。115は頸部に幅2cmの削出突帯を巡らす。116は頸部に3条の沈線帯を施す。沈線帯の上下が若干沈線帯よりくぼみ、削出突帯を表現する。116は最大径が35cmを超える大型品。頸胴部の境目に1条沈線をめぐらし、有段状となる。内外面ともに横方向のミガキ調整。

第53回下段

117～123は96CbSK153資料。

117～119は遠賀川系壺形土器。117は口縁部が短く外反する形態。内外面ともに横方向のミガキ調整を行う。118・119はいずれも胴部に沈線紋帯と重弧紋を施す。施紋順序は、①横方向の沈線紋帯を施す。②左回転で3重の弧紋を施す。外面のミガキ調整はいずれも施紋前に行っている。120は遠賀川系鉢形土器。通常、最終調整にミガキを行うが、胴部に横方向のハケ、頸部に板ナデがみられる。121・122は遠賀川系の壺か鉢形土器の底部。122はミガキ調整が認められるが、121は表面が磨耗して不明。123は氷式系削痕深鉢形土器。口縁端部に幅2.5～1.5cmの不揃いな押圧を施す。

第54回

124～149は96TiSB03資料。

124は遠賀川系壺形土器で天井部を欠く。125～129は遠賀川系壺形土器。125は口縁部が短く外反し、頸部から胴部にかけて緩やかに開き、胴部最大径が器高の下部にある、下膨れの形態。外面調整は頸部に縦方向の板ナデと胴部の一部に横ハケを残すものの、最終調整は底部付近に縦方向のミガキ調整、胴部から口縁部付近に横方向のミガキ調整を行う。内面調整は胴部上位以外には横方向を基本とするミガキ調整を行っている。施紋はいずれも最終調整以後に施す。頸部には2条の沈線紋で区画された削出突帯がある。胴部上位には指頭による横方向の連続押圧がある貼付突帯がある。さらにその下には2条の沈線紋がめぐる。なお、頸部上位には焼成前穿孔が1カ所みられる。126は口縁部が強く外反しない。口縁端部以外は前面横方向のミガキ調整を行う。頸部紋様帯は不明。127は頸部に3条の沈線紋帯があり、128も同様の沈線帯を持つが、上下の沈線を深くし、削出突帯を作り出す。129は口縁形態がいびつになる。胴部上位に2条の沈線帯を持つ。130は内外面にミガキ調整を行う底部で、おそらく壺形土器であろう。131～133は遠賀川系鉢形土器の口縁部。外

面調整は不明なもの、内面調整は横方向のミガキ調整を行う。134～137は遠賀川系壺形土器。137以外は口縁端部に刻目を入れる。ただし137は口縁端部が無刻目であることや外側調整に横ハケを行うため、鉢形土器の可能性も否定できない。

第55図上段 138～148は水式系削痕深鉢形土器。138～140は口縁外面に指頭による押圧が施されるもの、141～144は口縁端部に面取りをもち、押圧がないもの。前者は頸部が緩やかにくびれ、頸胴部の境目が調整の違いにより確認できる。一方、後者は口縁部が外反し、頸部を意識するものの調整による境目はない。145～148は底部。基本的には下から上へ板状工具を用いたケズリ調整を行う。148は底部付近に左回転の板ケズリを改めて行う。149は今回唯一実測可能であった条痕紋系深鉢形土器。口縁部がやや外反し、胴部がやや膨らみ底部にいたる形態。口縁端部に面取りを行い、調整は横方向の貝殻腹縁による条痕。

第55図下段 150～155は96Cbの土器集中地点（VA11k）資料。
150は遠賀川系壺蓋形土器。天井部に穿孔がある。150以外はすべて水式系削痕深鉢形土器。151と153は口縁外面に指頭押圧が施されている。両者とも頸胴部の境目が調整により意識されている。152と154は口縁端部を面取りし、指頭押圧がない。特に154は口縁部が短く折れ、壺化指向がみられる。155は底部。

第56図上段 156～162はSK01資料。
156は遠賀川系壺蓋形土器。天井部に穿孔がある。外側調整はおおよそ左回転でミガキ調整を行う。調整後、天井部から裾部にかけて2条の沈線がみられる。157は遠賀川系鉢形土器。口縁部が短く外反し、胴部最大径が上位にある。内外面ともに横方向のミガキ調整を行う。また、胴部上位に3条の沈線紋帶がある。158は遠賀川系壺形土器、口縁部を欠く資料。胴部最大径が上位になる形態。紋様は頸部に2条以上の沈線紋様帶の削出突帯と4条の削出突帯をもつ。外側に横方向のミガキ調整を比較的丁寧に行う。この資料の特徴として、焼成時の剥離痕と剥離した土器片（焼成剥離土器片）が接合した。これは三ツ井遺跡で土器焼成を行っていた傍証となり、実際、SK01に隣接して検出されたSB03は炭化物が広範囲に拡がる遺構であり、土器焼成に関わる遺構として注目される。159・160は遠賀川系壺あるいは鉢形土器の底部。161は遠賀川系鉢形土器。内外面の胴部にやや斜方のミガキ調整を行う。162は水式系削痕深鉢形土器。口縁部が短く折れる形態で、壺形土器と呼ぶべきか。外側に下から上への板ケズリ（1次調整）後、胴部に縱方向、頸部に横方向のミガキ調整を行う。

第56図下段 163～167は水田の可能性がある地区から出土した資料。
水田出土資料 163と164は溝（SD46）の脇に積まれた盛土中からセットで出土している。164は遠賀川系壺蓋形土器。天井部に2つの突起があり摘部分と考えられる。この突起に挟まれて中心には穿孔がある。裾部には2条の沈線帶で区画された削出突帯がめぐる。163は遠賀川系壺形土器。口縁部が短く外反し、頸部は比較的短い、胴部最大径はほぼ中位にある。内外面のほとんどにミガキ調整がみられる。口縁部下に2ヶ所の穿孔がある。紋様は頸部に3条の削出突帯、胴部上位と最大径付近に4条の沈線紋帶がある。165～167は水式系削痕深

鉢形土器の底部。

第57回

168～193は検出資料。168～179は遠賀川系土器。168～173は壺形土器。168は118・119と同様の紋様構成をもつ壺形土器。施紋順序も沈線紋帶の後、重弧紋と同じ規範ではあるが、口縁部が大きく外反し、端部が水平になることから、118・119より新相である。173は頸胴部の境目に若干段が付く。そこに2条の沈線紋が施されている。174～177は壺形土器の底部。175・176は脚状の底部。178・179は鉢形土器。180～191は水式系削痕深鉢形土器。192・193は内傾口縁土器。

4. 小 結

(1) 編年的位置付け

朝日遺跡

資料の概要で記したように、遠賀川系土器が出土する遺構群としては最古段階となった。ただし、現在整理中の朝日遺跡貝殻山地点96SK238資料は三ツ井遺跡より1段階古い土器群となり、三重県中ノ庄遺跡の古相土器群と同時期に比定できる。

3段階設定

さて、三ツ井遺跡の遺構群は大きく2段階に土器群が捉えられる。指標となるのは水式系削痕深鉢形土器である。口縁部外面あるいは端部に押圧がめぐるものと口縁端部を面取りし、押圧がないものとに分けられる。型式的に前者が古く、後者が新しい。根据は押圧がめぐらない資料は口縁部の特徴がより壺化指向で、遠賀川系土器に接近する。逆に押圧がめぐる資料は頸胴部の境目を意識し、さらに水式の口縁形態に接近する。実際、SK01の162は口縁部の屈曲が遠賀川系壺形土器と酷似するといった現象、月繩手資料と比較してもより壺化指向が強いものが新相となっている。また、水式系削痕深鉢形土器に共伴する遠賀川系土器からみても、壺形土器の口縁形態など前述した古相・新相を逸脱しない。

ここで尾張編年に対照してみると、SX01・SK50・96Cb土器集中地点はI-2期古段階、SK153・SB03・SK01・水田関連資料はI-2期中段階に比定できる。

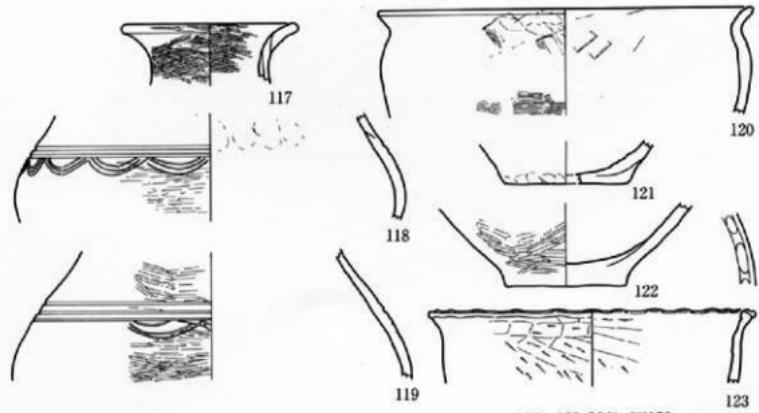
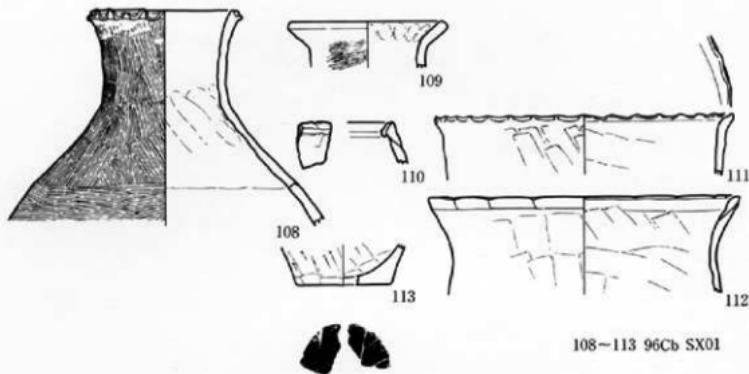
(2) 資料の特徴

土器組成

土器組成は遠賀川系土器の壺形土器・鉢形土器、水式系土器の深鉢形土器を主体とする。特徴的なのは、煮炊形態にはほとんど遠賀川系壺形土器がみられないこと、条痕紋系土器が明らかに客体的存在であることが指摘できる。これは、隣接する元屋敷遺跡の土器組成と類似し、他の遺跡にはあまり見られない土器組成である。

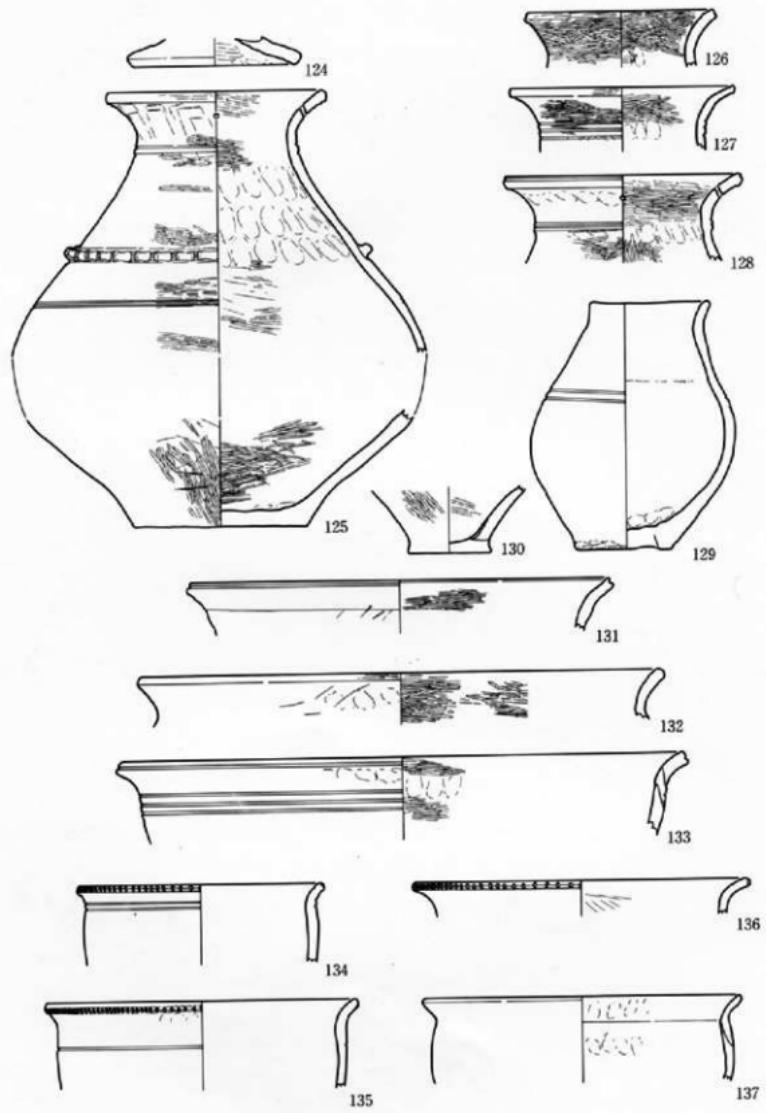
組成上客体的な存在はあるが、108の条痕紋系壺形土器は近畿地方の長原式系壺形土器との比較検討するうえで重要な資料となった。また、内傾口縁土器が前期の古い段階からみられることが判明したことは今後の検討に新たな視点を持たせた。

最後に、水式系削痕深鉢形土器の存在は、尾張平野部の煮炊具を見ていく上でより複雑な多元的系統複合を考えていく必要性を提示した。



0 20cm

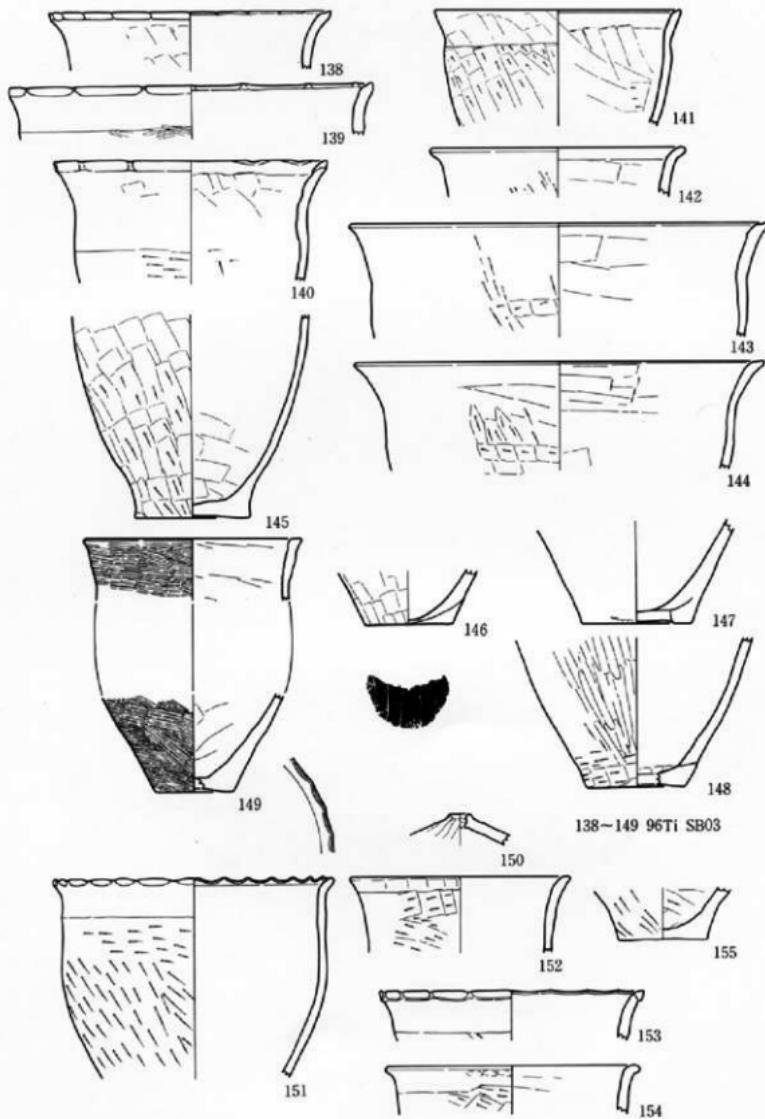
第53図 張生時代前期の遺物実測図(1) (1 : 4)



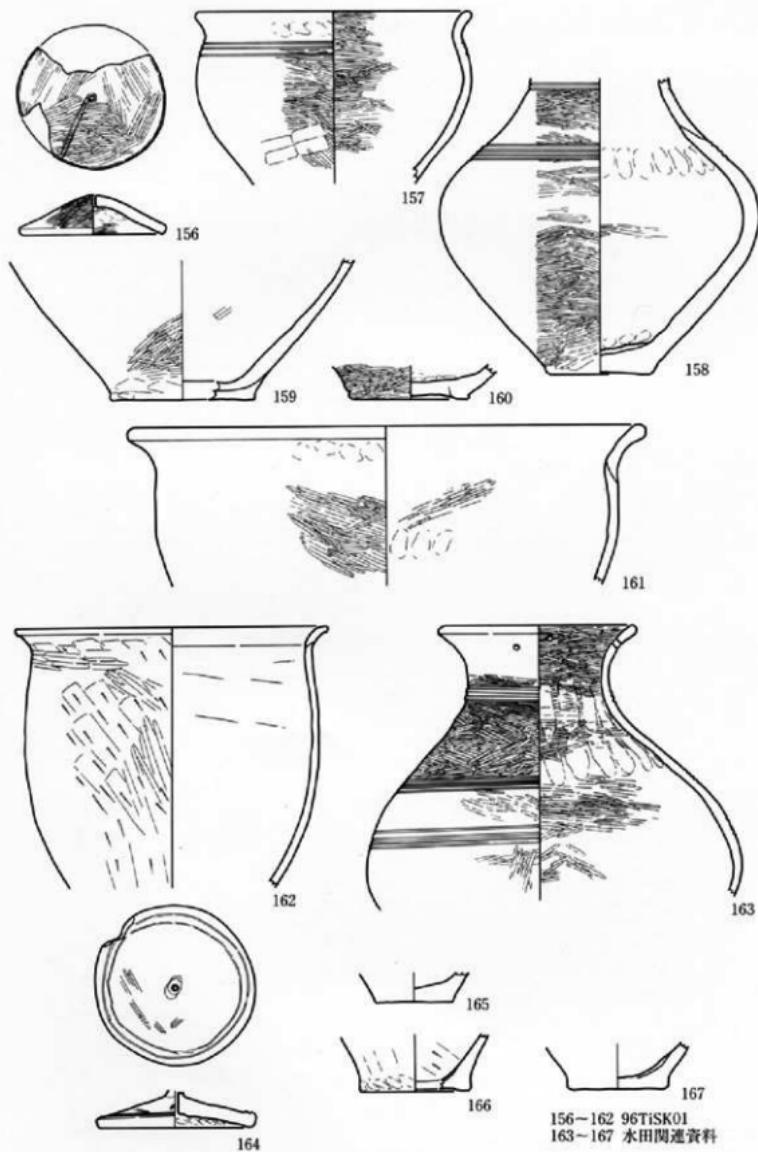
124~137 96Ti SB03



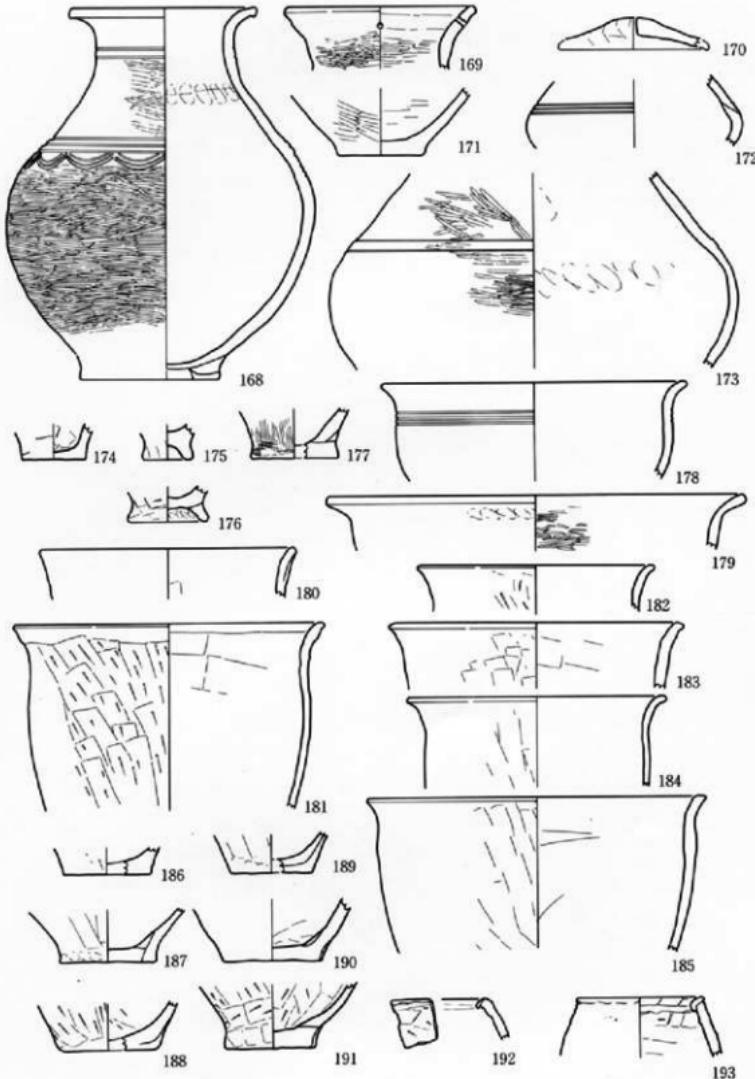
第54図 弥生時代前期の遺物実測図(2) (1 : 4)



第55図 弥生時代前期の遺物実測図(3) (1 : 4)



第56図 弥生時代前期の遺物実測図(4) (1 : 4)



168～193各調査区検出資料



第57図 弥生時代前期の遺物実測図5(1:4)